

2111201021111

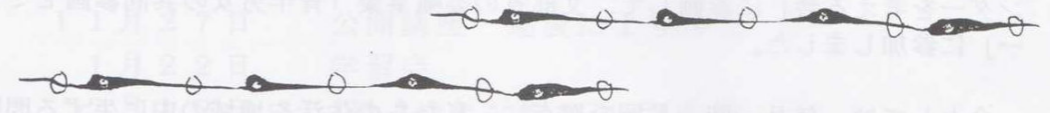


へこたれてはられない・・・!

ウィメンズスタディズ・ネットワーク
'04活動の記録

2004年
特別編集
「中越地震体験記」

へこたれていけない・・・!



目次

あいさつ	2
活動報告・会員名簿	3
地震がきた!	永井千恵子……4
あの日私は・・・	朝日 由香……10
恐怖の夜	鈴木千栄子……12
中越地震の時	樋熊 憲子……22
地震、家族、仕事	元川三枝子……24
どうにもやりきれない	大橋 良之……27
写真でみる被害状況	……30
私の中越地震	大野 一伊……34
私の7.13水害	その後の対応について 長野 洋子……41
私の被災体験 ～原発のある町から～	関根富紀子……44
ボランティア情報から	小林 博子……47
18th ウィルながおかフォーラム	ワークショップ報告 ……52
《がんばろう中越!!》	……58
編集後記	……66

ごあいさつ

私たちの会の活動も早、10年の月日を数えます。

振り返れば、1991年から3年間、県の事業として「ウーマンカレッジ・女性学講座」が催され、それに参加した女性たちが、受講後さらに学びを続けたいという意思で「女性学修了者の会」を立ち上げたことが発端でありました。会員の枠を超えて広く声をかけ、ウィメンズスタディズ・ネットワークングというニューネームで活動の一步を踏み出しました。

1994年・95年には、県内で活動するグループを結集して実行委員会を組織し、文部省（当時の呼称）の「女性の社会参加支援特別推進事業」の委嘱を受け、「女性学in長岡」を計画しました。

引き続き96年・97年には、長岡短期大学生涯学習センターの「若者とジェンダーを考える会」に参画して、文部省の委嘱事業「青年男女の共同参画セミナー」に参加しました。

会としては、毎月一回、長岡を拠点に、私たちの生活や地域の中に生ずる問題を女性学の視点で見直し、考えてみようという学習会を行っています。

メンバーが順番にレポーターとなって問題を提起し、課題を整理、意見交換をし、解決の糸口を探ります。身近な問題から世界各地で発信されるものまで、実に多様で興味深い課題が持ち寄られます。

また、私たちが問題としていることを地域の女性たちとも共有したいという思いから、年に一度「公開講座」を開いたり、各種イベントにも参加しています。

一年間の学びを『活動の記録』として冊子にまとめています。学習の成果を残すことは私たちの足跡であると同時に、女性学の資料としても役に立っています。

学習を重ねてエンパワーメントしたメンバーは、地域の女性学習グループに参加したり、女性政策に参画したり、地域での新たな活動に力を発揮している人など、メンバーの活躍の機会が多くなってきています。私たちの会は、それぞれの場で活躍するメンバーにとってコアとなる存在であり、いつでも気持ちよくやすらげる仲間の家でもあります。

昨年は、未曾有の災害のため学習会は中止が相次ぎ、公開講座も中止を決断せざるを得ない状況でした。

そこで、2004年度の「活動の記録」は、特別編集の「中越地震体験記」とすることにしました。

あの日から既に8ヶ月。被災地にも日常が戻りつつあるように見えます。しかし、それは表面だけのことで、ひとり一人の苦悩には多くの問題が課せられています。私たちが体験した、感じた「地震」から皆さんは何を感じられますか……。目を通していただき、被災したからこそわかる思いを受け止めていただければ幸いです。

ウィメンズスタディズ・ネットワークング代表 鈴木千栄子

活動報告

4月17日	総会
5月22日	学習会
6月19日	学習会
7月17日	学習会 水害により中止
9月18日	学習会
10月16日	学習会
11月27日	公開講座 地震により中止
1月22日	学習会
2月19日	18th ウィルながおかフォーラム参加
3月19日	総会



地震がきた！！

永井千恵子
(旧越路町・来迎寺)

地震が起きた。「ここは、ばか良いとこだの一、水害も台風も来ねし」と県内や全国で相次いだ災害を他人事のように傍観し、よもや我が身に降りかかることなどないだろうと安心していただけ、そうは問屋が卸さなかった。10月23日土曜日天災はやってきた。夕飯の肉じゃがを中華なべで作っていた。味付けの砂糖を入れたところで小さな揺れ、すぐ地震と認識した。

第1回目の本震5時56分のM6.8だ。越路は震度6弱。小さな揺れ、それにつぐ大きな揺れが始まった。夫が廊下から叫んだ。

「地震だ、早く出ろ、火は消したか？」必死で火を消したか確かめているうちにも、食器棚からは皿が50cmも私の背面に飛んで床で割れる音がした。テレビもガラス窓を倒しながら高い台から落下した。とにかく、夢中で逃げる背面から追いかけるようにガシャンガシャンと音が連続した。廊下を走り玄関前の柱につかまると、そこで夫が待っていた。玄関から走り出て表に飛び出した。足元から本格的な突き上げがドーンドーンボタンゴッタンズッタンバツタンズドゥン、もう形容のしがたい突き上げが始まった。まるで、巨大な恐竜が足元の地下でのた打ち回り尾を下から地表に打ちつけているような感覚だった。とにかく大地に足を踏ん張り無我夢中で立っていた。

2回目3分後の5弱が来た。いつ収まるのだろうか？収まらないかもしれない！という恐怖で頭の中が一杯になった。収まった。すぐ辺りの様子はどうかと県道まで20mくらい歩いて隣近所の人たちと安否を確かめ合った。前の床屋の80歳過ぎの夫婦は恐怖で腰も抜かさんばかりでとても立ってはいられなかった。家から出てきた人があちこち集まっていた。「あのばあさんはどうした」

「・・・あら血が額から出ている」「ここは危ないので避難所へ行きましょう」「爆撃にあったと思った」と言う人もいた。凄まじかった。情報は何もない。

そこへ7分後の震度5強。立て続けに4分後の震度5強。皆、まさか、またか、という表情でなるべく電柱が倒れてきても危険が無いところで静まるのを待った。天地のひっくり返るような地震が立て続けに起きて、いったいどうなるのだろうか？これで来ないのか？この勢いならまだ来るなどと思った。

「下手に動くと塀が倒れてくるので危ないから、しばらく様子を見た方が良い」とアドバイスしたのだが皆センターの駐車場まで避難して行った。私は我が家に戻ることにした。夫を探して無事を確認、携帯ラジオで地震があったことを知った。我が家の前に立った時、5分後の震度6弱。そしてその23分後震度5強。全てのものを崩れ落とすまで来るのかもしれないとその時思った。

『よーしこうなった生まれ育った家を見守ってやろう、どうなるか見定めてやろう』

と足を踏ん張り母屋に目を見据えた。2階が振り切れんばかりに、今にも吹っ飛びそうな勢いで激しく揺れていた。

『ああ、これでもう築54年も年貢の納め時だ、崩れるなら婿取り娘の私が…』と本当に倒れるかと思った。揺れというよりは下からの大きな突き上げも相変わらずだ。辺り全体がすごい音をたてている。負けてなるかと足を踏ん張る。

『家が揺れる、揺れる……』家が悲鳴を上げていた。その時、こうも思っていた。

『これが地震だ…地盤が揺れている』『人間の一生のうちでこんな体験できるのは稀有なこと、機会はめったにないぞ、さあ来い、この機会を逃すものか…』もうわくわくしながら体験したというのも事実だ。真に真に貴重な体験だった。この間、越路ではおよそ50分間に震度5以上の地震が実に8回来たことになる。その後も余震は断続的に続いた。

さて、日も暮れて来てふと母がいないことに気付いた。どこかに遊びに行ったのだろうか？後で聞くと美容院で金を支払うところで地震に遭遇、福祉センターの駐車場で避難して集まって来た人たちと一緒にいたとか、ほっと胸をなでおろす。母を気遣うのが遅かった。しかし、まだやらねばならないことが残っていた。明日24日には大地の会という地学を学ぶ人たちの団体に野外巡検を企画していたのだ。ほんのさっきまで明日のために、参加者の名簿、様々な手配段取りを全てすませ明日の巡検を待つばかりにかなりの時間とエネルギーをかけて準備していた。それなのに、この地震だ。案内を頼んだ新潟大学の教授や他の役員とどう連絡を取ったらいいのか？電話をかけても関係者には誰にも通じない。余震が来る、逃げる。そんな中やっと家の電話に連絡が入った。

「明日のことについて、誰に連絡しても通じない、今やっと永井さんにかかった。さっそく講師に連絡するが。」

「はい、お願いします。きゃー余震が一、きき、切ります」と言って家から脱出する。その晩はそんなことを繰り返した。家の電話は幸いに通じたが、他の家の電話が駄目に通じる所は多くなかった。携帯は通じずメールは夜半の12時過ぎにやっと通じた。

さっそく明日の巡検の集合場所の越路町総合福祉センターに中止の張り紙をしに行ったが、すでに明日使用するはずのバスは高齢者避難用に駐車場に集結していた。役場職員には「そっつらもん今更中止に決まってるろ…」と冷たい言葉を投げかけられたが、その時すでに道路は寸断され、とてもとてもそんな状況にならなかったのだ。あらためて地震の被害の甚大さがひしひし伝わってきて実感した。

ご近所は家の前の広場に集まり、とにかく情報が無いので私がラジオを持って行って貸せるなどして、状況把握お助けマンをやった。なぜかその晩は冷え込みの激しい日だった。身に堪えた。とり合えず家に入って暖かい服を持ち出そうと思った。懐中電灯を持って蔵まで行き、袋にフリースなど詰め込み、歩き出そうとした矢先また余震。片手に懐中電灯、片手に大きな袋、足元は物が散乱、余震の恐怖で「それ、大変、早く出なきゃあー」と慌てた余り、物につまずき見事に転んでしまった。脛をしこたま打って弁慶の泣き所をズルーッとすりむいてしまい、一晩中車中で痛みをこらえて過ごすことになった。ふと、こんな時怪我したらどうするのだろうか？と不安がよぎった。余震が怖くて車中泊にした。

大人3人で運転席に夫、すぐ後ろの席に母、運転席の隣に私という具合だったが、初めてのことで休む環境もよく整えず横になったのがあだとなり、身動きできないまま一夜を明かした。翌日はもう皆腰痛で、特に症状のひどい夫は車中泊は1日でリタイア、損害の軽い部屋で寝ることにしたが、夜間4回も余震のたびに玄関から外へ飛び出し避難する羽目になり、一睡も出来ない日がしばらく続いた。

私と母は3日間、ここなら家が倒れても大丈夫という距離にある玄関前に車を止め車中泊した。ゆるく傾斜しているのが余震のたびに車がジャンプし、前に動き出すのではないかと心配になってブレーキを引きなおした。それでも家にいるよりはガタガタ音がしないので安心できた。

ついに、4日目には腰の痛みに我慢できず断念し家に入った。家で寝ていても夜中に、それも明け方近くなると決まって余震が来るので、安眠できる日は無かった。

友達など車中泊の場所がなく、あちこちの空き地や知人の駐車場を転々としたという苦労話を後で聞いた。子どもも泣き止まず困ったとか、夜になると泣き出したり、地震の時に居た部屋には決して入らなくなった。親から離れなくなったなど何ヶ月たっても傷跡は深い。

翌日から生活、支援物資、食事、風呂

生活が一変し、朝から顔を洗う気にならない日が続いた。外で顔を洗う際に眼鏡を下に置いたのを忘れ「ガシャッ」と踏みつぶし、修理に2週間かかり、替えの眼鏡が合わず調子が狂ってしまった。そんなこんなで不便な生活だった。

しかし、結構楽しんでくれた。しばらく晴天が続き、毎日のように庭でバーベキュー三昧であった。一見するとどこかのリゾートでくつろぐ家族と見える。車庫で昼間は生活した。

水道、電気は1週間内で復旧、ガスは11月9日まで駄目だった。幸いにして池に山から湧き水を引いていたので、水は辺り近所にも分けながら不自由なく使えた。

食糧救援物資は24日から炊き出しおにぎり、27日からは本格的に開始になり、11月3日まで3食の食糧を取りに行くのは母の日課だった。重いからいやだと母が言うので1回だけ私がもらいに行ったことがあった。パンやおにぎりが毎日色々な県外の会社から届いていた。誰もパンやおにぎりを見るのもいやになったが、もったいないので冷凍したりして米粒一粒も捨てることなく食べた。自衛隊の非常食カレーがおいしかった。七厘で火を起し原始に返った生活をしてきたが、だんだん疲労がたまってきて、夜はもういつも早めに床に着いた。

風呂は、最初に26日に寺宝温泉に行ったが混んでいて1回で止めた。29日からは近くの銭湯がオープンしたのでマイ風呂桶持参で通った。遠くからの客が多かった。混雑振りは凄い。洗い場の水が排水されずあふれていたりして、早々店じまいする日もあった。洗い場の蛇口の前には順番を待つ長蛇の列、入浴中の余震には誰も驚かないのには驚いた。風呂に入りたいという思いが強いのだろう。徐々に会った人と話がはずんだ。無料の極楽湯は駐車場が混んでいて近づけなかった。期間は短かったが長岡カントリー倶楽部の湯は最高だった。残念ながら私は自衛隊の湯には行く機会が無かった。

さて、日中は家に居なかったが、大きな余震のたびに家のことが心配で、家の者が片付けに家に入ったり、屋根に登っていたりして事故にあっていないかと心配だった。家に居るときは、畑の大根を引っこ抜いては支給された硬くなったおにぎりと葉っぱで大根雑炊を作っては辺りに配ったりして感謝された。

このように何日かは毎日、私にしては珍しく3食作って過ごし、新聞はじっくり読み、見舞いの電話にも十分対応できた。そんな生活しているうちに頭もぼーっとしてきた。これではけないと11月3日にテニスをしたり美容院に行ったりと久々に人間らしい気分になることにした(勿論その間にも余震は来たのだが)。

家にも片付けは余震が怖くて家に入れない状況が続き、家に入ると見ていたかのように余震がタイミングよく襲ってくるのにはほとんど参ってしまった。

少し余震が落ち着いてからは台所など生活する部屋の片づけを黙々とやった。夜は逃げられる程度に酒を飲み寝たが、余震には敏感になり熟睡は出来ない日が続いた。そんなこんなで酒の量だけがさらにぐ〜んと増えた。他の女性達に聞いてみても同じ事を言っている。私の友達が全て飲んべーではないのだが。酒を飲まずには寝付けない、たとえ無しで眠りについても必ず朝方嫌な夢を見て目が覚めるようになった。4ヶ月経っても時々恐ろしい夢で目が覚めると皆同じ事を言っている。

我が家の被害状況・・・こんな事態でも師走が来る

冬支度が始まった。庭の植木の冬囲いをはじめ諸々の越冬準備がこの時期の仕事である。大雪も予想され手が抜けない。例年のように土日の雨の日以外はそれに時間を費やした。

屋根や家周り、県道までの20mの消雪パイプの設置が待ったなしの仕事。他に地震のためひびの入った私道や崩れた排水溝の補修をやらなければならない。寒さの中、腰をいたわりながらコンクリート詰め作業。家の被害は半壊で玄関に黄色の紙が貼られた。余震が少なくなってからは2階の部屋の大修理を自力で始めた。正月には娘が帰省するので1階には危なくて寝せられない。部屋が足りない。10月23日から寝泊りしている平屋の部屋を娘に提供すべく急遽2階を修理し、私達が引っ越すことにした。

我が家の被害と修理状況は、外壁が2階の天井に落ちて、天井の板がその重みでふくらみ、それがいつ落ちてもおかしくない状態だ。

まずそれを撤去し、垂れ下がった天井を下から持ち上げ固定する作業から始めた。天井に落ちた壁だけは板金屋から撤去してもらったが、あとは夫婦でやった。それが終わると今度はよいよ2階の10畳間の壁と廊下の修理だ。土壁を落とし、運び、ベニア板を打ち付け、マスキングのテープを貼り、水性ペンキで何回も塗り重ねて完成。寒い中、脚立に登ったり下りたりとペンキの缶を持つ手が痛くなった。

「ペンキをはみ出すな。もう一回塗り重ね、ペンキをたらずな。」と夫は血液型A型の性格を如何なく発揮し矢継ぎ早に細かい指示を飛ばした。こんな作業が連日、夜半まで続いた。仕事が終わって疲れて帰ってきても休むことなくその作業が待っていた。結構辛かった。この時ほど地震を恨んだことはない。

ご近所さんの被害は瓦屋根の家は新築を除き全て被害にあった。塀は倒れ、大

規模半壊の家が多かった。親戚や遠方からの子ども達などの手を借りてあちこちで修理が始まった。住めない家の住人は親戚に身を寄せたり、この際だからと別居したり夫婦もいた。今まだ次々に家屋が取り壊されている。新しく建て替えている家もある。道もいたる所で下水管などが抜け上がり、修復しても今また凹みが進んでいる。通勤の大動脈のJR信越線の高架橋や国道404はいつ復興するのか、一方通行の不便さがまだ解消されない。その後の経過はどこの被災地も同じだろう。

徐々に余震が無くなっていったが、我が家の活断層が動いた

夫は退職し家にいて地震の後片付けに余念が無かった。それはいいのだが、早く以前の生活に戻そうと頑張ってしまうていた。そして、例年の通りに何事も運ぼうとしていた。当然、例年この時期は大変なのに、さらに地震が余計の仕事になってのしかかってきた。

それもこれも完璧にやろうとしていたところに問題があった。思うようにことが運ばず、母も私もそう動けないのに、夫はその不満を顔を合わすたびに何から何まで日常の細部にわたるまで舌打ちして不満をあらわにした。母も私もその異常なまでの態度に（前からそんな気性だったが、さらにこの地震で増幅）足音を聞くだけで、戸を開ける音を聞くたびに、何かしゃべっているのを聞くたびに、気配だけでもびくびくするようになり、ついには心臓がビクンと動き動悸がするようになりまてしまった。

母は近所に遊びに出かけて帰って来る時に、家に向かうともう気が沈みこんだという。母がある時

「チエコ、足音が聞こえるたびに心臓がドキドキして辛いんだけど」「私もそうよ」「そうかお前もか」「いやだね、どうかなりそうだね」という会話をしょっちゅうしていた。

『がんばろう、中越』・・・どう頑張っているのか複雑な気分になった。

そんなことが続き、大晦日に私の憤懣は爆発した。（そのくだりはさすがにここには書けませんので省略します。また機会がありましたら）私はそこで決着をつけたが、仲裁に入った母をもっと苦しめることになった。

母は地震以前から眠れない日は半錠か1錠の睡眠薬を飲んでしたが、地震以後は毎日1錠になった。薬を飲んでいるとぐっすり眠れて昼間は元気に過ごしていた。しかし、この頃から起きている時はずっとあれこれ思い悩むことが多くなり、おどおどし、さらには一日中辛いことばかり考えるようになった。「また、怒られるのではないか…」と心配するようになり怯え、悩みはひどくなった。完全に鬱の症状が見えるようになった。

聞いてみると、どうしたら死ねるか、その方法ばかり毎日考えていたとのこと。そして、寂しがつて一人で居られなくなった。でもおかしいことに、私が冗談言うことが出来た。普通は鬱になると笑えないのだが、母はよく笑っていた。新聞も普通に読んでいたが料理はさすがに変化に乏しくなり味は落ちてきた。体重もぐんぐん落ちてきて、本人は身体がどこか悪いのだろうと総合病院に通院し、検査したが胆石が見つかっただけで異常は無かった。

しかし、そのうち病院に検査で通うのが大儀になり歩くことも苦痛になってき

た。風呂に連れて行っても些細なドアや戸の開け方にも戸惑うようになった。だんだん進んでいくので検査で行っている病院に精神内科があったら受診をするように勧めた。1月末にさっそく受診し、薬をもらった。その薬が効き始め、翌日からもう思い悩むことは無く快方に向かっていった。まだ薬は続けているがやれやれであった。ちょうどあの地震から3ヶ月目のことであった。

「心の病は怖いね、でももう大丈夫」

と言っているうちに、2月28日の凍てついた朝にごみ出しに行き、地震で窪んだ所に氷が張っていてスッテンコロリンと見事に転び、左手首を骨折、全治6週間。骨折に関しては夫も経験者で同類相憐れむで、夕飯時には仲良く骨折の情報交換をしていた。ギブスが取れたのは4月の中旬であった。これも地震被災の一つか、半壊以上では医療費の支払い補助があるので利用することにした。

本当に地震は怖い。高齢者が地震以来めっきり足腰が弱くなり体調を崩しているとかちこちで聞く。母ばかりが例外ではなく普遍的なことであるとその深刻さに今更ながら思い知らされる。阪神淡路大震災でも3ヶ月目で心の病が出始めて、10ヶ月目で自殺者がピークだったとの報告がある。まだまだ心していかなければと思っている。

2部屋は未整理のままだし、消雪パイプの亀裂も大きくなったままだ。とりあえず心身ともに健康であればいいではないかと思うのだが、我が家の住人の確執は続く。大災害でこそ家族の絆が試される時であるのに。でも「確執は強し」でした。

エコノミー症候群、心臓の異常患者多発、プライバシーのない避難所での生活、交通機関が不通で子どもの通学の送迎、このずたずたの道を小国や小千谷の妙見近くまでの牛乳配達人、2ヶ月水道・ガスのない生活をしてきた友人など、本当に皆どうしてそんなに頑張れるのだろうかと思つて越後の女の忍耐強さ・力に私はただ驚くばかりだ。

反面いくら頑張っても、とうてい解決されない問題が身体を蝕んでいることを忘れてはいけないと思う。去年多発した水害や台風、その後のスマトラや福岡などで地震が相次ぐのを聞くにつけ、物質的な被害はもとより、そこに住み続ける生身の人間がその後、表面にはすぐには表れないが、ボクサーのボディーブローのようにじわじわと後から効いてくるダメージを受けるのだと思うと、本当に可哀想で同情の念を禁じえない。

最後に、ウイメンズの方々をはじめ沢山の方々から励ましのお手紙、電話、お見舞を頂きましたこと深く御礼申し上げます。

あの日は・・・



朝 日 由 香
(長岡市・青葉台)

中越地震当日、私は81歳になる姑の夕食準備で味噌汁を温めていた。いきなりドーンと突き上げられるような感触と共にキッチンの食器が一斉に棚から落ち、その後大きな横揺れがはじまった。

突然の事態に状況を把握できずにいると

「お母さん地震だ！」

と子どもが叫んだ。その叫びでようやく事態を把握し

「テーブルの下にもぐって！」

と叫び返した。すぐ停電になり、薄暗闇の中で割れた皿の上をよろめきながら夢中で歩き、姑と子どもと3人でダイニングテーブルの下にもぐり込んだ。

1度目の揺れが起こった直後、携帯電話が鳴った。

「今、高崎駅なんだけど地震で新幹線の発車が遅れて帰りが遅くなると思うよ」

「お父さん、今こっちも揺れて食器が上から降ってくる！」

夫からだった。テーブルの下で受けた電話はそこまで話をすると切れその後夫と連絡が取れたのは夜中の12時を回っていた。

ゴーという地鳴りのような音が聞こえたかと思うと2度目の大きな揺れが始まり、母が「家がつぶれる」と泣きだしそうな声で叫んだ。何とか外に逃げないと……ベランダの窓を開け、外に出ようとしたが、大きな揺れのせいか窓が開かない。反対側から必死で窓を押すとようやく開き、足の悪い姑を子どもと二人で抱きかかえ庭に出た。姑は腰を抜かしたのか地べたにそのままへたり込み動けなくなった。振り返ると家も電柱も大きく揺れていた。「何とか外に逃げることができた」胸をなでおろしながら姑を見ると裸足のまま寒さと、怖さでガタガタと震えている。

2度目の揺れが収まった後、靴とコートを取りに家に入ろうとすると

「お母さんどこに行くの、家が崩れるよ！行っちゃだめだよ」

息子の叫びを振り切り

「おばあちゃんの靴と車椅子を取ってくるから」

その時、再びゴーという音が聞こえ3度目の大きな揺れが起こった。地面が張り裂け地の底に落ちて行くような恐怖感に襲われ、立っていることすらできず地面に座り込んだ。

あまりの恐怖に「大地よ静まれ！お願いだから大地よ静まって！」と心の中で祈った。あの時の恐怖感は5ヵ月を過ぎた今思い出しても体がすくむ。

その後も、何度となく大きな揺れが襲い、どうやって車椅子を家から出したのかよく憶えてないが町内の防災委員の方から姑を負ってもらい小学校に避難した。

長岡市は自主防災比率が低いとされるが、私が住む町内では自主防災組織の活動が活発で、震災の1週間程前に震災避難ビデオの回覧が行われたばかりであっ

た。自主防災委員の方々に助けられ、地域の防災活動の重要性を痛感している。

避難所が寒かったため、町内の多くの住民は車中で過ごしたが、小さな子どもと高齢者同居世帯で避難所は一杯になった。避難所では余震が起きる度に悲鳴が聞こえ、不安で眠れぬ長い夜が続いた。

避難所の寒さと余震で姑は体調不良を起したものの大事にはいならず、家族全員怪我もなく、無事だったことは本当に幸이었다。

震災後、余震の為か常に体が揺れている感じで1人では自宅に入れず、余震が来ると心臓がドキドキするといった症状と不眠が続いた。急性ストレス障害である。少しでも症状が緩和する方法を考え、避難所を離れ、知人の家や旅館などで数日を過ごした。自宅に戻ってからも日中は友人と過ごし、余震が収まるまでの1ヵ月間は家族で川の字になり、服を着たまま眠る生活を送った。

多くの友人・知人たちから震災見舞いのあたたかいエールをいただいた。不安と緊張で混乱している私の心が電話で話を聞いてもらう度に楽になっていく。

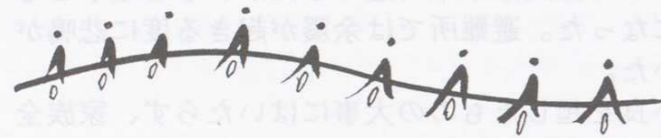
急性ストレス障害はあたたかい心遣いによってダメージから癒され、自分らしさを取り戻すことで乗り切ることができ、感謝の気持ちは言葉では言い尽くせない。

自宅の被害状況は壁や風呂など一部損壊程度で済み、自宅で生活が送れる状況だったため、被害の大きかった人たちのために「何かできることはないか」という思いにかられ、被災10日後から産業カウンセラーの仕事を通して、メンタルサポートと就業支援の震災復興ボランティア活動を開始した。

我が家の窓からは、連日メディアで報道されていた最も被害の大きかった山古志村民の仮設住宅が見える。

震災後の長引く復興の中で産業カウンセラーとして「心のケア」や「再就職」支援に少しでも役立てれば幸いと考えている。

恐怖の夜



鈴木千栄子
(長岡市・栖吉)

「あの時」一瞬何が起きたのかわからなかった。

今まで耳にしたこともない凄まじい音に、爆弾が落とされたのかと思った。激しい揺れに地震だと気づき、咄嗟に左後ろのピアノの下に潜った。飛び退くと同時に飾り棚の大きな壺が降って来た。電気が消えた。椅子にしがみついてもガクガクと揺れる身体。モノの壊れる音。呼吸が速くなり心臓が飛び出しそうだ。何度も何度も深呼吸しても収まらない。心臓はドクンドクンと早鐘のように打っているのに指先は冷たくなり手足から力が抜けていく。

このまま死ぬのだろうか……。この世の終わりなのだろうか……。

その時携帯が鳴った。よろけながら取りに行く。夫からだったが通じない。けれども無事であることだけはわかった。

10月23日の夕食は、別棟にいる次男と車で10分程離れた所の長男の二家族が我が家に揃うことになっていた。私が餃子を作る間に夫と次男はドライブがてら食卓にのせる漬物を買って出かけていた。長男からは少し前に、家を出てこちらへ向かっていると電話があった。隣には次男の連れ合いと1歳になったばかりの孫が居る。二人はどうしているだろう。大丈夫だろうか。

とにかく外へ出なければ。そう思って懐中電灯を取りに暗がりを手探りで二階へ行く。

足を何処へ下ろしていいかわからない。散乱した物をどけてやっと懐中電灯が入った靴を手にした時、下から声がした。隣家のご主人だった。

「鈴木さん、大丈夫ですか？」

「怪我はないですか、迎えに行きましょうか？」

「長靴を持って来たから履きますか？」

続けざまに言われたことに一つづつ大声で返事をしているうちに少し落ち着いて来た。

「助かった！」

と思った。靴を履いてよろけるように玄関を出ると、隣家の永井さんに守られるようにして次男の妻が子どもを抱いてうずくまっていた。

永井さんは、夫婦と二人の子どもと共に家から外へ逃げて来たら、我が家から次男の妻の「助けて！」という声がするので駆けつけてくれたのだそうだ。二人を外へ出してくれ、私が一人で家の中に居ると知らされて、動かなくなった玄関扉を男の力で思いっきり引っ張って開けて、大きな声で私を呼んでくれたのだ。

私は、比較的落ち着いて迅速な行動をしたつもりでいたけれど、この時に永井さんの家族に声をかけてもらわなかったら、ショックで胸がつぶれて立ち上がる力を失っていたかもしれない。

ほっとして互いの無事を確認する間もなく次の大きな揺れが来た。家の側は危ないということで皆で広い道路に出る。道路に亀裂が走り、電信柱が大きく傾き、

前の家の石垣が崩れている。近所の人たちで固まり、できるだけ広くて危険でない場所を探して移動する。その間にも何度か揺れが来て、その度に肩を寄せあって静まるのを待つ。

自主避難

私の住んでいる地域は長岡の南東部、悠久山公園の裏側にあたり、国立の雪氷研究所がある。栖吉町でも通称前山という戸数29戸の小さな町内である。この研究所の構内にもあちらこちらコンクリートがひび割れたり陥没したりしているが、とりあえず町内の一番高台になるこの場所に私たちは避難した。

訝えざえとした月明かりに長男の姿が見えた。飛んで行ってしがみつきたい思いで名前を呼んだ。彼は来る道中、ビルが傾き、家が潰れ、電線が切れて空に舞っているのを見、波打つ道路を必死でハンドルを握って来たのである。我が家の前まで来ると、車庫が崖に落ちそうに傾き、大きな庭石が道路に転げ落ちているのを目にして相当動揺したらしい。無事に出会えてよかったと喜んだ。あとは夫と次男の帰りが待たれるが、二人は絶対大丈夫、車を捨て歩いてでも私たちのところへ帰って来ると信じていた。

どれほどの時間が経ったのだろうか……。ふと聞き慣れた車の音がした。夫と次男が戻って来た。これで6人が一緒になれた。長男の妻と1歳になったばかりの孫は、彼女の実家の仙台に里帰り中で地震に遭遇しないで済んだから、一家8人怪我もなく無事であったことは幸いだった。

誰もが不安で、身体の震えが止まらない。研究所の人がハンガーにずらりとかかった作業用の防寒服を持って来てくれた。袖を通すと温かい。男性たちが家に戻って毛布や着る物を持って来た。次男の妻と孫は毛布をかけてもらい、何人もの人が気遣ってくれた。

徐々に被害状況がわかり、各自が今夜は家には戻らないほうが賢明だという結論になった。登山用、キャンプ用、釣り用などのテントやシート、敷物、角材、ロープ、ストーブなどを集め野営の準備が始まった。約50人の町内は二ヶ所に分かれてその夜をすごすことになった。

身を寄せ合って入ったテントの中で孫はママのおっぱいをもらって眠りに就いた。座布団と毛布を重ねても下からコンクリートの冷たさと夜気の寒さが伝わって来る。引き続き余震によけい寒さが増幅されるようだ。

被害格差

テントの外から夫に呼ばれた。長男の家の地域の人とやっと携帯が繋がったという。それによるとその地域では電気が切れずにテレビを見ていられるとか……。夫はこれから長男と共に様子確かめに行くと言って、危険なことはやめてほしいという私の言葉を待たずに出て行った。

二人が戻った。家はほとんど無傷であったから、すぐに子どもを連れてそちらへ移れと言われた。ためらう私に夫は重ねて、「小さい子をここに寝かせてはおけない。道中に危険な箇所はいくつかあるけれど、大丈夫だから、心配いらないから。」

と言う。私は次男の家族と一緒にごそごとテントを出た。

いつも通る道なのに、どこを走っているのかよくわからないほどヘッドライト

の先は黒々と大きな穴が開き、何本もぎざぎざの亀裂が走り、マンホールが1メートルも噴き上がっている。それが、やがてぼつぼつと電気の明かりが見え、営業しているコンビニが目に入った。ほぼいつもの光景と変わらない様子に驚いた。

長男の家は、夫の言うとおりの大きな被害はなかった。不思議な気がした。電気と灯油を生活のエネルギー源としている彼の家で、深夜2時に風呂を沸かしテレビで地震のニュースを見ていることが信じられない。つい先ほどの、死ぬほど怖い思いをしたのは、夢だったのだろうか。あたたかい布団に横になって、今もテントに居る町内の人たちを思った。この年の春から町内会長となった夫は、自分だけは残って寒いテントで夜を過ごしている。皆が辛い思いをしているのに、幼い孫のためとは言え私までここに移動して来て良かったのだろうか。後ろめたい思いがする。

みんなで頑張ろう

24日もいい天気だった。朝一番におにぎりを持って家へ戻る。全員の分は無いので年寄りと子どもに食べてもらうよう配る。

夫の指示で長男が事務所（我が家は測量業務を営んでいる）から発動機を持って来た。

公民館は研究所の近くにあり、平屋のお蔭でほとんど被害は無かった。そこに上手く発動機と繋げて電気が点いた。ブルーシートで屋外台所スペースを作り、電気炊飯器と米と野菜を持ち寄り食事の仕度を始めた。それぞれの家の冷蔵庫にあった物も並べられ、非常時でありながら、日曜日のちょっとしたパーティのようになった。

この頃は、誰もが気分はハイの状態にあったように思う。誰もが、町内全体の被害の大きさを認めたくないと思っていたのかもしれない。傾いたり歪んだりぐちゃぐちゃになった家だけれど、片付ければ住むことができる。皆がそう信じたかったのだ。

25日の昼食から炊き出しが届くようになったが、公民館では汁を作り続けた。年寄りのためにお湯を沸かしストーブで部屋を暖めた。自分の家の片づけをしながら大勢の食事の世話をするのは大変で、自然と作業をする人とそうでない人が出て来る。それにも不平を言わずリーダーシップをとってくれる人があり、作業を明るく盛り立ててくれるムードメーカーになる人がある。懐の大きい優しい人たちのおかげで、私の中にも、頑張ろうという勇気がわいて来た。

町内は、全壊10戸、大規模半壊を含む半壊家屋が9戸、残りは一部損壊であり、片付けるだけで居住が可能な家は一軒もない。液状化で地滑りが発生し、道路も寸断され、避難勧告地域となってしまった。

小さな町内会でもやらなければならないことは山ほどあり、夫は何日も公民館に泊まりこんで走り回っていた。親戚や知人の所へ移る人や他地域の避難所へ入所するなど、町内住民全員の落ち着き先が決まった日は、久しぶりに夕食を夫と共にすることができた。家族が揃っていつもの味を口にするのできる幸せ。美味しいね、お腹一杯、という言葉を書くことの幸せ。

「そうだ、元気だったら何でもできる！くよくよしても始まらない！」

2ヶ月ぶりの我が家

本震の後子どもを親に預けて、バスを乗り継いで駆けつけて来た長男の妻は、黙々と片づけをしてくれた。その後も襲って来る大きな余震に、短期間では収束がつかない避難生活が予測され、私たちが窮屈な思いをしないようにと気遣って、彼女は仙台へ戻った。

そして12月半ば、彼女はしばらく見ないうちにしっかりと歩けるようになった孫と一緒に帰って来た。くたびれ果てた私たち夫婦はこの子の笑顔を見て、しみじみと、生きて今が在ることに感謝した。

私たちは、12月23日、2ヶ月に及ぶ長男宅での避難生活にピリオドをつけ、応急修理の済んだ自宅に戻って来た。仮設住宅や仮住まいへの入居のほか転居した家もあり、町内は半数以下に減ってしまった。

家は、まだまだ方々傷だらけだけれど、大工さんが床下へ潜り、天井に上って、手を尽くしてくれたお蔭で不便なく生活できるようになった。当初は異常に感じた柱の傾きや床の歪みなども「慣れる」とあまり苦にならなくなった。

暮れから続いた19年ぶりの大雪は、危険箇所を被せたブルーシートの上に降り積もり、ひととき、地震の傷跡の醜さを隠してくれた。

雪が解けたらシートを取り除き、崩れた石の階段や敷地と土台の間に開いた大きな深い穴を補修しなければならない。それと同時に改めて家の修復をするつもりだが、期待通りの安全と安心は得られないだろう。それでも適当な所で折り合いをつけて、この家で暮らしていこうと夫と共に心を決めた。

ライフラインの復旧した11月から見附市の妻の実家に世話になっている次男家族も春になったら、大規模半壊の家を取り壊して、家を建て替えることにした。若い夫婦にとって、突然に降りかかってきた異常事態に、今後をどう生きていくかという問題を緊急に決断しなければならないのだから、相当に苦悩したと思う。彼らは今、勇気を持って一歩を踏み出そうとしている。

地震が残してくれたもの

突然襲いかかって来た地震によって、身体の震えが止まらぬほど底の知れない恐怖を味わい、理不尽な生活を強いられている私たちだが、この経験によって得たことも多い。

*まず何よりも、『人の心のあたたかさ』を感じたことである。

家族、親戚、友人、町内の人だけでなく、調査に来た県の土木の人、長岡市の職員。私が出会った行政の応援に来た福島県、山形県、宮城県、八王子市の人たち。給水車も、仙台、八戸など方々から救援に来てくれた。新発田市から来た電気工事の人たちは、数日間満足な睡眠も得られずに懸命な復旧作業にかかっていた。夜遅く作業が完了し、一週間ぶりに電気が点いた時には大歓声があがった。皆が嬉しくて、その夜は公民館に酒を持ち寄って喜び合った。保険の調査員、ボランティアの人・・・みんな優しい人ばかりだった。言葉はなくても、「大丈夫ですか？」「頑張ってくださいね！」という、ねぎらいと励ましを感じ取った。

*『プライバシー』に関しては、何かと考えさせられた。

小さくても50人余が集まる町内会で、全員を統率することはできない。それぞれの家庭には家族の事情があるから、たとえ相手のことを思えばこそであ

っても立ち入れない領域がある。全壊になった家を前に途方にくれる家族が頼りにして相談に来れば、その家族が立ち行く目途がつくまで世話をしてくれるけれど、何も言わない人にも手を差し出していいのかどうか迷ってしまう。相手がこちらの差し出す「手」を求めているのなら構わないのだが、遠慮していたり、知らないからだとしたら、もう一歩中へ踏み込んだ方がいいのだろうか。

災害に関する“お知らせ”を配布してもらく読んでいなかったり、自分勝手な受け取り方をしていたり。移転先の住所を置いていく人があり、黙ったままの人もあり。災害のせいで普段より付き合いが近くなり、知らなかった事情も漏れ知れてくる。今まで以上に親しさを感じ信頼を置くようになった人もあり、以前より距離の遠のいた人もある。

私の回りの小さな集団でもこのような状況なのだから、この数倍・十数倍の集団となる避難所ではどうであっただろうか。「プライバシー」とは、個性豊かな人々が集まり生活を営むなかで、尊重しなければならない大切な領域であると同時に、自分と他との垣根となってしまうまいよう、ソフトな個性でありたいと私は思う。

*連日同じような内容で繰り返される『マスコミの災害』報道に、違和感を覚えたのは私だけではないと思う。

ある場所で、山古志村からヘリコプターで牛を運び出した農場の若奥さんと一緒になったことがある。初対面であったがお互いが激震地帯で被害にあったという共通の体験から話はずんだ。私は彼女に、不躰な話を向ける相手ではないことを承知しながら、「牛を助け出すためにヘリコプターが必要なことは分かるが、作業を取材をしようと10機以上もが低空で旋回を続けるので、振動と轟音に大勢の人が迷惑し、ヘリコプターが獲物を追うハイエナのようにあさましく思えた」と、正直な感想を伝えた。すると彼女も、地震後に生まれて初めて牛に触ったこと。孤立した牧場へヘリコプターに乗って何度も往復したこと。必死な救助の状況を遠慮の無いテレビカメラが追いかけたこと。場面・場面をつなぎ合わせ、勝手に違う方向へ解釈されてしまい、関係者に誤解を生じさせたのではないかと考えていること。などを話してくれた。

仕事であるとはいえ、各所に迷惑をかけているのではないか、近辺で不愉快な思いをしている人がいるのではないかと、と身を縮めている彼女なのに、マスコミの人らのなんと傍若無人な振る舞いであったことか。それに引き替え、仮設住宅や各地のボランティアの人たちが手弁当で駆けつけてくれたという。

「このご恩は一生忘れられない」と彼女は言っていた。

新聞も、大きな見出しと写真を駆使して、ことさら「悲惨な災害」を表現していたように思う。各地の被害状況を伝えることや被災者の窮状を訴えることは、大切な新聞の使命である。しかし、それだけでなく、今回の地震がなぜ起きたのか？そのメカニズムをわかりやすく解説したり、政府が発表した災害救助法や耳慣れない法律用語について、生活する者の立場で内容を噛み砕いて教示した記事を期待している。支援策も、当初のものとは変わったり、追加があったり、次々と変動する対策の何がどう変わったのか、違いは何なのか、それに伴う申請手続きについてなど。テレビとは違う新聞の利点を活用して、何回でも、繰り返し、丁寧に、記事にして掲載してほしいと思う。

*今一番、私が胸の中に強く感じることは『感謝』である。

「あの一瞬」から理不尽な生活を余儀なくされ、怯えていた私を救ってくれたのは、「人の心のあたたかさ」であった。いち早く駆けつけてくれた友人、遠くから手紙や電話で力づけてくれた人、大勢の人に助けられて私は立ち上がることができ、ようやく、私らしくなれた。

ウィメンズに寄せられた全国からのあたたかい支援の心を「お見舞い」として頂戴した私は、自宅へ戻ってからの必需品である炊飯器と掃除機購入代金の一部として使わせてもらった。公的な支援金や補助金には上限や使途範囲に枠がはめられていたりするから、領収書の提出や報告義務の無いお金は、本当にありがたい。

家中のモノがぶっ飛び、土嚢袋で200袋も捨てなければならなくなったけれど、それでも残った物も数多くある。いかに無駄の多い生活であったことか。これからは夫と二人の生活で、余計な物を持たないシンプルな暮らしを心がけようと思う。

2月中旬、我が町内で新年の顔合わせが行われ、地震以来4ヵ月ぶりに20名が集まり、その後の生活ぶりに話が賑わった。その中で、家族5人が悠久山地区の仮設住宅に老夫婦と長男家族の2軒で住まいをしている男性に、仮設住宅の結露がすごいと聞いたがその他にも不自由なことはないですか、と尋ねてみた。すると彼は、「結露はすごいし雪も多く難儀なことはたくさんあります。だけど、自分たちでさまざまに工夫をして生活しています。全壊した家に入れない私たちに住む所があるだけでありがたいです。わがままは言えません。」と、言った。彼は本当に感謝している様子だった。私は、物静かな初老の男性によって、「感謝する心」を深く考えさせられた。がまんを強いられて耐えるのではなく、自分なりの快適な生活を作り出そうとする彼のまっすぐな姿勢に感銘を受けた。

今ようやく春が来て、南の方から桜の便りも聞かれるようになった。

街のあちらこちらで建物の取り壊しが始まり、櫛の歯が欠けたように空き地が目につく。長年住み慣れ愛着のある家を離れなければならなくなった人の無念は如何ばかりかと胸が痛む。

復興はまだまだ。これからの先は長い。大暴れした地震の記憶を風化させることなく、あの時に感じた理不尽なものへの憤りを自らのエネルギーにして、新しい生活を築いていこうと思う。

中越地震の時



樋熊憲子
(長岡市・渡里町)

長い間、何回も大きな揺れが続いた。私は新潟地震の時は中学3年であったが、未だに経験したことのない地震だった。

久しぶりに家族そろっての夕食を始めた頃だった。その時、私はすばやくテーブルの下にもぐり、娘は2回目の揺れで地震が続いていると気づき私に早くテーブルの下に入れと言われたとか。夫はテーブルにつかまって立っていた。立てないからつかまっていたということの後から聞いた。

幸い停電はなかったので地震情報をテレビで見ながらしばらくは家の中にいたが、揺れはなかなか収まらない。1時間ほどして外に出てみると皆は外に出ていた。改めて町内には大勢の住人がいるんだと思いながら、近所の人からあちこちの状況を聞いたりした。しばらくしていると神戸から転勤してきた夫の友人が歩いて来られた。住んでいるマンションは停電になり歩いて階段を下り、携帯電話も使えないから近所を歩いてみて回っていると言う。この方は阪神淡路大震災にもあい、ここ長岡で今度の地震である。目にした状況を話してまた歩いて行かれた。とても落ち着いていた姿が印象に残っている。近所に住んでいる視覚障害のご夫婦は防災用の服装で避難されてきた。上から物が落ちてこない所で椅子に腰掛けてもらい、その支度を見ながら、私は何の準備もなく毎日を過ごしていることと、あわてて手提げ袋に水と買い置きのパンと犬の餌を持って外に出たけれど普段からの心構えすらなかったことに気づかされた。サイレンの音があちこちで響きわたり、パトカーが注意を呼びかけをして回っていた。携帯電話は通じなかったが、メールで子どもたちに無事であることを送り、こんな時こそ携帯電話が必要なのを痛感した。10月とはいえとても寒い夜だった。

揺れは続いていたが各々が家に戻り始め、私たちも家に戻った。飼い犬のゲージは家から外へ行く前に玄関前に移動しておいたのだから、私たちが外に出ている間鳴き声が聞こえていた(玄関の扉は開けたまま)が、しばらくしたら声は聞こえなくなっていた。心配しながら覗き込むと、犬の目は点、放心状態の姿だった。どんなに恐ろしかったかと思う。口々に「大丈夫だよ」と言っているが、実は私たちも大丈夫ではない。履き物を履いたまま家に入り、家の中の様子がどんなのかを見ながら落ち着かないまま後片付けを始めた。夕ご飯を食べていないことに気づいて、早速おにぎりを作り、食べながら次にしなければならないことを話していた。このときは阪神淡路大震災の生活情報はとても役にたった。部屋の電気は一晩中つけたまま、玄関に近い部屋で服を着たままで休んだ。

翌朝、犬の散歩に出かけた。昨夜の後はどうなのかわからなかった。揺れていたのだから遠くには行けないが、元気に散歩に出かける犬の様子にちょっと安心した。所々の道路側にブロック塀は崩れ、灯籠は落ち、いつも見る家々の様子とは違っていた。そして歩道に多くの車が駐車しており、車中泊の人もある。歩きながら地上の空気

は冷たいのだが、いつも感じている空気ではない空気、無機質の冷たさを感じた。こういう冷たさは初めてである。

我が家は幸いにも大きな被害はなかったが、庭の7基の灯籠も全部倒れ、ブロック塀は隣家の庭に一枚板のようになって倒れていた。けが人が無く安心したもの、2日後には家の周りのブロック塀は全部削って低くしてもらった。大きな揺れがまだある。

外国人研修生

会社(自営)には中国からの研修生6人と実習生が11人いる。翌日から夫と私は彼女たちの生活支援に入った。研修生は全員避難所へ、実習生は各自で生活しているのでこういう状態ではどうしているかが心配であった。日曜日でもあったので、みんなが一緒にいるというわけではない。あちこちを探し、みんなに会ってほっとし、恐かった話をお互いにした。中国では地震はない、日本は恐いと口々に言っている。いつ地震が終わるのかと聞かれても、まだ続くとしか答えられない。テレビの報道でどんな状態かは知ってはいるけれど、これからどうしたら良いのかわからないのである。ガス漏れでガスは止まっているし水道も止まっているので、いつも温かい食事しかとらない彼女たちには今の状態を説明しても分かってもらえない。とりあえずの生活物資を手渡し、何とか自分たちで対応してもらった。みんな同じ状況なのでどうすることもできないのだ。

仕事は月曜日から動き出すことができた。毎日顔をみて声をかけ、元気そうにしているけれど大きな地震がたびたびくることへの不安と恐ろしさで精神的にも疲れてきている。お互いに地震を体験したことで話を聞くことができるが、怖さや不安の感じ方はみんな違う。一人で行動する人、仲間と一緒にいても口数が少なくなり一人で閉じこもってしまいそうになる人、揺れるたびに大きな悲鳴でまわりの人がパニックになってしまうこともあった。夜になると実習生はいつも近くの公園に避難していた。アパートは鉄筋で大丈夫と言っても、公園に行っていた。数週間後、夫が避難所の様子を見せに連れて行きどちらに住みたいのかを聞いたところ、ようやく今のところいいと納得したようで言葉の通じないもどかしさを改めて感じた。外国での生活は文化も生活習慣も違うので、生活を支援するほうもいろいろ気配りをしているのだが、地震などの非常事態の時の支援体制が本当に必要だと思った。

さびしい駅前通り

10月23日以降上空には何基ものヘリコプターの音がし、会社近くの駅通りに人影は本当に少なかった。日の短い頃なので夕暮れの暗さと大手通りの静けさは異様であった。歩いている人も少なく、しばらくの間店内が壊れたままの状態の商店もあり、夜の住人が少ない街だと再認識した。

夜はお見舞いをいただいた方へお礼と現状を書きつづった。多くの方からお見舞いの電話をいただき、改めて心配してもらっていることに感謝し、幸いにもテレビで放送されている状況とはちがって、大丈夫であると伝えた。

身近なことだけで精一杯の日々がずっと続いたように思う。

地震、家族、仕事



元川 三枝子
(長岡市・今朝白)

『原稿を書かないと、温泉付きの総会に参加させてもらえないぞ』と、尻に火状態でパソコンに向かっている。

地震を体験して感じたことや、そのとき自分が何をしていたかなど、地震(水害も可)をテーマにして書くことになっており、仲間から「あんたでなきゃ書けないこともある」という助言もいただいた。個人的なことが不特定多数の人たちの目に触れる(さらされる)こと、しかも文字として残るといふのは、どうも苦手である。メンバーの中で私にしか書けないことといたら、仕事ならみのことしかない。どこまで書けるだろうか。

そういう私の職業は地方公務員、勤務地は長岡市役所。今回の新潟県中越地震(10月23日(土曜日)17時56分発生)のように、震度5強以上の地震が発生すると長岡市地域防災計画によれば、原則的には全職員が勤務地か近くの避難所に出向くことになっている。災害対策本部にかかわる業務や道路等の復旧業務など所属部署によっては本庁集合という人たちもいるが、私の場合は近くの避難所に行くことになる。

2回目の大きな揺れで、日ごろ一番安全と思っていた我が家を家族みんなで出ることになった。とっさに、まもなく食べる予定で、いつもより奮発した寿司の入った容器を袋に詰めていた。隣近所の人たちと一緒に、じきに収まるだろうという気持ちで家々や電信柱がユサユサと揺れるのを見ていた。いつもと違うと思いはじめるまでに時間はかからなかった。少しでも揺れが収まると電池(ライト)や飲み物、椅子、防寒着などをおっかなびっくりしながら家に取りに入った。お隣さんがラジオ付きライトを取りに行ってくれたが、まだ震度は言わない。頭の隅を『避難所に行かなければならないんだらうな』という思いが何度かかすめていくが、この場を動きたくなかった。

防災センター

突然、そばに置いたバッグの中で電話が鳴った。近くに住んでいる職員からのもので、

「学校に人が集まり始めているようなので行ってみませんか」という。この4月から阪之上地区防災センター(阪之上小学校のこと)のセンター長をおおせつかっている私としては、その電話で動かないわけには行かなくなった。家族には

「ちょっと学校へいってくるね」と言い残し、近くに住む他の職員にも声をかけながら学校に向かった。そこには明かりがあった。

建物に入ると、学校の先生がたへのあいさつもソコソコに本部へ連絡を試みるが、連絡が取れない。そうこうしている間にも避難者は目に見えて増えていく。とりえず受け入れ態勢を確保することにした。7.13水害の体験から避難者名簿も作ることにした。まもなく本部との連絡はついたが、まだ指示は出ない。そんな状況の中で報道関係や避難者への照会電話が増えてきた。呼び出しはできないから掲示板を設けよう、避難者から情報がほしいと言ってきている、動物アレルギーの人がいるので犬を何とかしてほしい、赤ちゃんのミルク用のお湯がほしい、毛布が足りない、長岡駅舎では危険なので乗客百数十名を受け入れてもらえないかと照会してきているが…などなど、次から次へといろいろな問題が出てくる。

避難者名簿に載らなかった人も含め最高時には1,500人を超えていたと思われる、その数の多さは市内でも1,2番であった。ここに避難された人々の不満の声は私たちには届かなかったものが多いと思うが、今でも申し訳なく思っていることは、1回目の食糧の配給量が不足していて全員に行き届かなかったこと。何よりも情けなかったことは、私が私の身体を信用できなかったこと。3年前に子宮ガンで抗がん剤治療をした身体は、不眠不休の連続でまいってしまい、両足もリンパ浮腫で重いと音をあげていた。

日数が経つにつれて避難者からの要望が増えてきた。こんなときにわがままではと思われるものもあった。また精神的に不安定な人もいた。中国からの実習生等との間では、生活習慣と言葉の違いによる、ちょっとした気持ちのズレもあった。あわただしい日々が続いたが、阪之上地区防災センターは、11月9日に避難者0人となり、閉鎖することができた。

職場にもどってから他の避難所の話しが聞けた。ライフラインがまったく使えないところと多少なりとも使えるところ、本部以外からの救援物資や炊き出しなど、それぞれの防災センター、避難所でみんな違うことを知らされた。

私が出た阪之上地区防災センターは、駅から近く、電気、水道も使えて条件的にも良かったせいか、報道関係の取材も多かった。その対応には随分時間を費やされたが、報道関係の力には驚かされた。テレビにしても新聞にしても、ゆっくり見ている暇はなかったが、報道された情報によって同様に被災された市外の担当者や電話がつながった。取次の方の話によると

「報道によれば阪之上地区防災センターは物資が余っているようだから、物資のない自分たちのところへ回してほしい」

というものだった。私たちが余るほどではないが多少なら都合ができるし、ちょうどその方面近くまで行く方もあるので

「そこまで取りにきてもらえるなら」と、関係方面の了解を得て回答をした。まもなく先方から電話が入った。その内容は

「道路が寸断されていて取りにいけないので」という断りのものだった。『ここにいる人たちは、まだ恵まれている』という思いと同時に、同じ被災者として何ができるだろうかと考えた。だまっではいられなかった。敷地外に待機している報道関係者に救いを求めた。それがどこまで通

じたかは確認できず、私の中に痛みが残った。

また、救援物資（弁当の差入れ）のイタズラ電話には憤りを感じさせられたが、善意への感謝に“用心”という2文字を持ちあわせることを知らされた。

我が家

ライフラインが使えなかった我が家の家族は、地震発生当日、かなり遅くなってから避難してきた。私には家族が同じ建物にいるというだけで安心できた。

私が当分帰れないと判断した夫は、翌日から荒れた家の中の片付けを一人でやってくれた。とても84歳の母には見せられない状況だったという。その後、着替えにもどった我が家は、いろんなものが転がっていて、私の足元がまだ揺れているように感じられた。この感覚は、しばらく消えなかった。

後に夫は当日のことを「忘れられない誕生日になった」「しばらく風呂に入るのがこわかった」と語った。本音だと思った。地震の発生したとき入浴中だった夫の行動は、今では笑い話になっている。まだ我が家の修理や片付けは終わってはいない。できるときに、できる人がやることにして、とにかく無理はしないことにしようということにしたが、いつまでのんきなことを言っているのだろうか……。

あれから半年

地震発生から約半年が経った。今はただただ感謝の気持ちでいっぱいである。初めての被災体験のなかで、共にがんばって私を支えてくれた同僚や学校の先生がた、とくに学校施設のあらゆる機能を解放して協力してくださり、足りない物品を自宅から運んで提供して下さった先生がたには、お礼の言いようもない。

また、応援に駆けつけて下さった他市職員やボランティアの皆さん。災害対策本部経由や直接このセンターへ心あたたまる救援物資をお寄せ下さった皆さん、なかには自らも被災者でありながら避難所を利用させてもらったからと、差入れやボランティアをして下さった皆さん。本当にありがとうございました。

原稿を書くにあたって、公務員の守秘義務にまで気づかせてくれた我がスタッフにも、おわびとお礼を言いたい。

どうにもやりきれない



大橋良之
(長岡市・表町)

第一号は父方の叔母からでした。例によってゆっくりと「今テレビで見たら長岡が地震だというので、驚いて電話したの。被害はどうでした？」1回目の震度6が収まって間もなくの電話でした。「あ、叔母さん。有り難うございます。ちょっと食器が割れたくらいで、たいした被害ではありません。」「まあそれならよかった。ニュース見てたら長岡が地震で、こっちもかなり揺れたので急いで電話したのよ……」と言っているところに2回目の震度6。「ご免なさい。又来たので切ります。」これが始まりでした。

第二号はその後。「ハイ、大橋です」「あ、いわさわです。大丈夫でしたか？」相手も慌ててかけたのでしょう。「いわさわ……イワサワ……い・わ・さ・わ」顔が浮かんできません。「あの一どちらの……」「あ、失礼しました。南高バスケットの岩沢です」。

私の高校時代の3年後輩からでした。報道関係の仕事をしていて、ニュースを聞いてすぐに電話をしたそうです。当日の電話はもう1本。「あ、ナカムラです。大丈夫？」なかむらという知人もかなりいます。「えっ」「ザカ、おれだよ」それで解りました。私を「ザカ」と呼ぶのはバスケットの仲間だけですので。(私の旧姓は石坂です)1年先輩の中村さんでした。それ以降は電話が繋がらなくなったようです。一応の落ち着いた後は、大変な見舞いの電話でした。(7:3で妻が多かった)新潟に移り住んで30年。ですから30年以上は東京周辺に居たわけですので、むこうに居る仲間も多いわけです。

小学生の同級生 (恩師の還暦祝に声がかかり、それ以後3年に1度くらい集まります)何故か、中学のつながりはできていません。

高校の同級生 («今の私を作り上げてくれた仲間たち」と私の中でもっとも大切にしているつながりです。1年毎開催のクラス会には常に参加が20名を越します)

バスケットのOB(昨年50周年の高校。前半の25期ぐらい迄のOBが毎年2月に新年会を開き、常に30名を越す参加者がある)

そして昔の会社仲間たち……と。

他に、「電話が繋がらなくて」と行って実家に様子を訪ねた友人が3人あったそうです。

「人のつながりが一番の財産」と考えている私に、今回の地震はこんなに大きな嬉しさをもたらしてくれました。

この嬉しい気持ちを、大切な仲間たちに伝えたくて、(と言うのはウソで、10月23日には既に「出席」の返事を出してあった)11月19日の高校のクラス会に出席しました。「とにかく、あんなに心配してもらったみんなに絶対無事な姿を見せなきゃいけないと思って出てきた」これが挨拶でした。

そして「ついで」と言われても喜んでくれた小学校の仲間たち8人が、横浜中

華街に急遽席を設けてくれて、帰りの電車の時間迄の2時間半、楽しい時間を作ってくれました。

そしてそして、今年に入って2月の19日バスケットの新年会に、「寒梅」と「雪中梅」をぶら下げて元気な顔を見せてきました。残るは昔の会社仲間だけ。地震は私に「人のつながり」という財産を、益々強く、大きくしてくれました。

ウンガヨカッタ

殆ど被害が無かったからこんなおんきな事を言っていますが、一つ間違えば大騒ぎになったと思われます。

その日、妻は集まりが新潟であり、友人の車に同乗させて貰って長岡に戻ったところでした。7月に転居していた14階建てマンションの前で車を降り、建物に入ろうとした時の突然のことでした。最初の揺れが収まったあと、「とても怖くて中に入れないから下にいる。」

とインターホンで言ってきました。すぐ隣に大きな駐車場が有り、皆さんそこに集まっていると言う事でした。夫婦二人きりですので、取りあえずの安否の確認はできたわけです。

大きな揺れが収まった後の部屋は、29と20インチのテレビが床に転がり、二本のスピーカーが倒れ、壁に掛けた額はずべて落下しました。居間に置いていたサイドボードは、扉は開きませんでした。コーヒークップとグラス類が落下してお互いにぶつかり合い、かなりのものが壊れました。それもマイセン、ジノリと高価なものばかり。どちらでもよいものは奥に飾り、目に見える場所にきれいなものを飾りたいのは人の常で、これが災いしました。しかし、サイドボードと対角に置いたキッチンの食器棚の食器は何も壊れず、ガラスの引き戸の本箱からも一冊の本も飛び出さなかったのは不思議と言うほかありません。

その日の夜はやむなく車の中で過ごしましたが、翌日の夕方には電気、ガス、水道のライフラインも復旧し、頻りに襲う余震の中、覚悟を決めて家でやすみました。

前年の2月に義母が亡くなりました。思考はしっかりしているものの、三度の梗塞で右半身が不自由になり、ベッドでの生活を余儀なくされていました。その夜も普段と変わらず、9時過ぎにやすみました。翌朝よく眠っているなと思いましたが、それでももう7時になるからと声をかけた時には息を引き取っていました。苦しんだ様子も無く、88年間の生涯を誰にも看取られずに静かに閉じました。

そして10月、今度は義父。見事なまでに誰の手を煩わす事も無く、同じように誰にも看取られずに94歳の生涯を閉じました。私は会合に出かけ、妻が外出から戻るほんの1時間の間の出来事でした。パジャマに着替えようとしていた様子でした。こちらも苦しんだ様子は見られず、穏やかな顔をしていました。

こんなことを言うと叱られますが、もし二人が健在でこの地震に遭遇したらと考えるとゾッとします。水が止まってしまい使用できないトイレ。停電でエレベーターが止まってしまった10階の我が家。いつ収まるともしれない大きな余震。二人の老人がこうしたさまざまなアクシデントにとっても耐えきれたとは考えられません。『でもよかったよね』顔を見合わせた私たち夫婦の口から出る言葉、これが現実です。

これだけの大きな地震が起こり、これだけ沢山の人が被災し、これだけ大きな被害があった中で、どんな巡り合わせ、どんなホシの下に居たにせよ、私に言える事はひとつ「ウンガヨカッタナ」これにつきます。

中越地震。長岡という同じ地域で生活しながら、家を失い、家族を失い、悲嘆に暮れる方たちの居る一方で、「ウンガ……」と言っている私がいる。「これでいいの?」と思いつつも何も出来ない、何もできないでいる私がいる。「被害を受けた皆さんご免なさいね」と詫げる私が、もう一方にいる。どうにもやりきれない思いで毎日を送る私がそこにいます。

写真で見る被害状況



地滑りで傾いた家



道路の亀裂



陥没



土蔵の壁落下



裏山の地滑り



くずれた石積



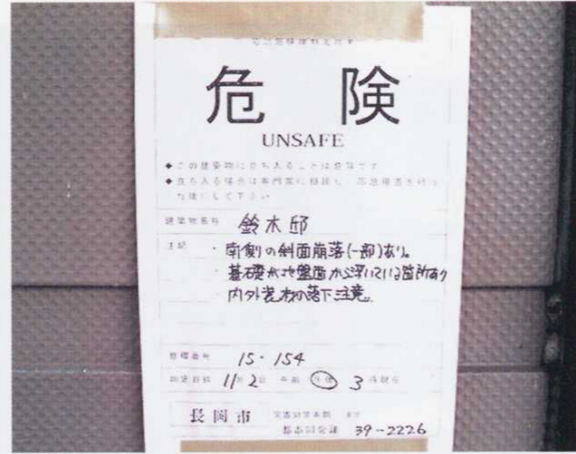
自衛隊のテント風呂



倒れた墓



危険度診断の張り紙のある家



危険度の張り紙



倒壊した家 1



倒壊した家 2



亀裂の入った階段



はがれたボード



崩れ落ちた土壁



衝撃ではずれたペアガラス



散乱した食器



飛び出したキッチン

私の中越地震



大野 一 伊
(長岡市・千手)

姪に送ったメールから

あの時私は、長岡中央図書館で行われた「幸齢セミナー」が終り、帰宅していました。とても疲れたので、テレビを見ながら熱いお茶を飲んでいました。

突然の激しい揺れ、「なに！これ！！」追い討ちをかけるような大きな揺れがまたもや襲いました。口の広い花瓶が倒れて無残にもカサブランカが投げ出されました。テレビの上の人形も落ちました。土門拳の写真集の上を立てかけておいた亀の甲が、空を切って部屋の中ほどまで飛んできました。そこでやっと「地震だ！大きいぞ！」と感じました。

夫が、犬の散歩から帰って来たばかりで、犬の足を洗っている時でした。「おーい、おっきな地震だぞ！近所の人は外に出ているぞ！」と声をかけられても「大騒ぎしなくても・・・」と、そう言ったような気がします。

テレビの前に座り込んで地震情報を見ていたとき、千葉の孫からいち早く「おばあちゃん、大丈夫！」と電話が入りました。テレビの速報を見てすぐかけてよこしたのでしょうか。「大丈夫だよ！」と弾んだ声で返事をしていたような気がします。きっと声がうわずっていたかも知れません。

その後、新潟や東京、横浜と安否を伺う電話が入りました。皆さんが心配してくださるのも恐縮してしまいそうな程、軽い被害で済みました。電話が来るたびに気にかけてくれる心遣いに、ありがたく、また嬉しくなり元気が出てきました。ライフラインも止まることなく、ただ余震に身を震わせているだけでした。

そんなわけで地震体験といわれても、被災体験も避難体験も有りません。だからとても書きづらいのですが、あの時の様子を豊栄市にいる姪にメールを送ったものを掲載することにしました。(姪は、長岡に住んでいて2年前に豊栄市に移転したばかりです)

10月25日

*〇〇さん 地震見舞いありがとう。

幸いにも私のところも娘のところも、たいした被害もなく、ライフラインもまったく支障がありませんでした。ご安心下さい。地震のため学校が休校になり孫達が家に来ています。(父親は被害が大きかった滝谷の親戚へ手伝いに、母親は勤めの学校へ)

余震は毎日あります。長岡市内は平常のように見えますが、虫の目になって見るといろいろな被害が起きています。息子や娘や私が避難所を訪ねて聞いてきたことなど順次お知らせします。

10月27日

*今日の余震のときは、二階にいました。大分揺れましたよ。もう心臓がドキドキしましたが、それでも23日のとき倒れた本箱を慌てて押えました。揺れの方向が違うようでした。一回目より倒れるものがなかったのは震度が小さかったんですね。

二階から降りると犬のシローは怖がって私にしっかりとしがみついて離れませんでした。

*市役所関係の建物は安全を考えてすべて閉鎖しました。したがって予定の行事はすべてキャンセルしました。柳原の公民館の裏手にかかっている橋のたもとが盛り上がり亀裂が入っていました。神明神社の被害は大きいです。

10月28日

*23日の地震後、市内の学校の体育館は避難場所になりました。近くの方々が多く集まり、今も減ることなく続いています。

*西千手のある家に行きましたら留守でした。宮原の家にも行きました。そこでも留守でした。健康センターや工業高校・市役所などに避難しています。高齢家族で不安だから、隣近所で寄り添っているようですが、ライフラインがきてもやっぱり家にいると怖いからと避難所にいました。

*中島小学校の避難所では、高齢の方が呼吸困難になり救急車を呼びました。ほとんどが持病のある高齢者です。

*昨日27日の大きな余震のとき、体育館で避難している人は屋外に避難しました。

全員が外に出たかと確認の為体育館を見廻ったら、動けない方が2人ほど残っていました。やはり高齢の方でした。

「腰を骨折、床ずれ(褥創)、動脈瘤があり、心臓病を患っているから動けない」そんな方がどうやってここまで来たのでしょうか。このまま放っとけないと早速病院へ搬送することにしました。2時間後にその方はまた救急車に乗って戻ってきました。病院も手一杯で、入院するほどの病人でないからと・・・救急車の救助員は、病人を動かさないから担架のまま置いていきました。でも担架の底は脇の棒より下がります。毛布を何枚か敷いて応急処置をしました。何時までもこの状態で置いておくわけにはいきません。ヘルパーさんと相談して翌日、寺泊の施設に入ることが出来ました。

27日は、6回救急車の出動を願いました。大阪消防署など他県の車は病院までの道が分からず戸惑っていたようです。

*鬱のときは、物が食べられない寝れないといい、爽の時は30分もしゃべりつづけている爽と鬱を繰り返す女性。

来週予定日ですという妊婦さん。

など本当にいろいろな人がいます。

10月29日

*長岡市内では120数ヶ所の避難所があり医療支援が行われています。小規模の避難所でも各地からの支援が来ています。

遠方にいる息子が、医師や看護師さんたち数人で医療救助員としてやってきま

した。長岡や小千谷・川口と小規模被害の手薄のところを廻るようです。高齢者の方たちが一週間も過酷な集団生活をしているのはストレスが溜まります。それなのに移動医療班が声をかけても、積極的に診てもらおう気配がないのです。みんなが不自由を我慢しているのか、気が張っているのでしょうか。名前のつくような重病や怪我はないようですが、健康ではない筈です。「〇〇さん背中が痛いって言っていたでしょう。頭が痛いと言っていたでしょう。診てもらったら・・・」と声をかけてやらないと診て貰わない人もいます。元気そうにしても、血圧が高かったり、不眠だったり。血圧を測りながら話しかけると、ひとしきりおしゃべりした後は、ほっとした顔に明るさが戻ってくると言っていました。

これからは、継続した医療はじめ心のケアも必要ですね。

10月30日

*小さい子どもは夜泣きや騒ぐので迷惑になるからと、避難してきてすぐ出て、車で寝泊りしているといひます。昼間の避難所は、若手が仕事に行き高齢者だけが残っています。ボランティアさん等から優しい言葉をかけられ、仲間と一緒にいる安心感がなによりらしいのです。話す相手がいることがどんなに楽しいか知っているのです。

特に普段一人暮らしの人は、大勢で食事をするこの楽しみ、話す相手がいることの楽しみを喜んでいるようです。

また反対に、人付き合いの苦手な人はストレスを起こしているといひます。高齢者やひとり暮らしの人たちの生活上の問題が見えているように思われました。

自分は帰りたいが、隣のお年寄りを残して家に帰れないという人もありました。

*なかでも、え!と思ったのは、電気のブレーカーの操作を知らない人がいました。安全弁が落ちたら上げればよいと思うのですが、それがわからないといひます。若い方は、電気製品をホームセンターやデパートで買いますから、地域の電気屋さんとは馴染みも無ければ、どこに行けば修理してくれるのかさえ分からないといった状況です。

日常のこまごました小さなことでも相談しやすい人、相談できる場が必要で、これが地域の役目、隣近所のコミュニケーションだろうと思ひました。

10月31日

*地震後一週間が過ぎ、私の行動範囲も少しづつ広くなりました。友人とのおしゃべりで、この度の地震の様子がわかりました。被災状況も場所によって大きな違いがありました。

*四郎丸地区で、今でも小学校に避難生活をしている知人は、お婆さんがいるので夜だけ学校に泊まり、昼は店に出る生活をしています。家の中は家具が倒れたままめっちゃくちゃで、どう片付けていいか分からず、お連れ合いは廊下に寝ているとか。「ガスも来ないし電気も来ない。停電の暗闇は恐ろしいよ。電気だけでも来れば何とかなるのに」といいながら、どうしようもないといった表情でした。

*三八の市が立つ場所に車の中でずっと泊まっていた障害のある子どもさん(23歳)は、家のガラス戸が壊れ、愛宕神社の鳥居が倒れた様子におびえて、片

時も母親から離れず、姿が見えないと「ママ・ママ」と叫んでいます。高齢者だけでなく障害を持った方々の心情は計り知れないと思ひます。

地震直後から、こうした人たちの支援の輪が動き出していると言ひました。

*大半の人は、何時来るかもしれない余震に不安を感じながら、どうせ片付けてもまた散らかるから手をつけないうまにしている人もいます。

久しぶりに会う人々の挨拶や話し合いの半数は、お互いの地震体験話から始まり、本題は先延ばしになってしまいます。

11月2日

*毎日のテレビや新聞報道で知っていると思ひますが、11月2日現在、学校の体育館にいた避難者は三分の一に減りました。しかし、まだ、子ども連れの家族や日中家に帰った人が夜には戻ってくるようです。

*昼間の千手小学校には6・7人の女性の高齢者が居りました。あの時の停電の恐怖から未だに帰られないのです。

*家の中が散乱して帰られないという方には、ボランティアの援助がされています。チラシが避難所や各戸に配られましたが、活用する手段の相談も誰かがしてやらなければ利用者がいないという状態だそうです。

地震から10日も経つと、家に帰り風呂に入ったり後片付けをして、夜は避難所でみんなと一緒に寝る。毎日配られる新聞を読み、テレビ体操をするなど生活パターンをそれぞれが作っていました。

全国老人クラブ連合会の女性リーダーセミナー報告から

11月30日、標記のセミナーで新潟県中越地震現地報告をせよと言われ、緊急地震報告をしてきました。

大地震の恐怖の実感がない私は、大変困りました。そこで被災地をまわり、当事者から話しを聞き、写真と資料を持って行きました。その報告の要約を記してみます。

阪神淡路大震災が都市型災害とすると、中越地震は中山村型被害です。阪神の時のような家屋の崩壊や死者や怪我人が少ないように見えても、田畑を耕し、牛を飼い、鯉を育てるなど、自然と密着した生活が破壊されたのが今回の地震です。村全体が無くなるという非常に悲しい災害でした。

新潟県は、被害の大きい50市町村に災害救助法を適用しました。これは全県98市町村の51%に相当するものです。

家の崩壊は軒並みにというわけでもないように見受けられましたが、外見ではなんともないようでも、土台にひびが入ったり、傾いたりして要注意家屋が多いが目立ちました。雪国で家のづくりが頑丈にできているといひれませんが、それでも住める状態でないほど被害が大きかったのです。

道路の破損や家の崩壊などたくさんの災害写真をとりましたが、途中でシャッターが押せなくなりました。それは、崩壊したり、傾いた家があわれに見えたからです。隣の比較的新しい家は、住める状態で頑張って建っています。年輪を刻んだ家は、へなへなと座り込んだという有様に思えて仕方がなかったのです。

当初避難された方が約10万人を越えましたが、11月27日現在6,004人が避難しています。長岡でも846人おります。

高齢者にとってつらい地震でした。避難所に行きたがらない高齢者の理由の一つはトイレの問題があります。トイレが近いし、特に夜困るといいます。

ガレージのコンクリートの床に布団を敷いて寝てもらったとか、余震が来たら奥に寝かせた親を自分の体力では連れ出せないから玄関の上がり口に寝てもらった等、友人がつかうように話していました。

在宅介護の人は、電気は来ない水道が来ないでは家で介護しようにも出来ません。また被災地ではそうした方の受け入れがなく、施設も病院も廊下に寝せていたところもあります。家から離れたくない、家で世話をしたいと思っても、出来なくて、縁故を頼って遠く離れた施設に入ってもらわなければならないなど、いたるところで支障をきたしております。

先日訪れた、山古志村虫亀地区は、全村が避難した地区です。報道されたように牛や鯉をヘリコプターで運び、災害湖が出来て水を抜くなどみなさんも記憶に残っていると思います。その中の一つの集落です。

避難所は高校の体育館でした。当初300人いましたが、親戚や子どものところに行ったなどで、今は280人います。

この地域は、鯉を飼い、牛を育て、農作業で生活をしていました。家は補修をすれば住めるかもしれませんが、電気・ガス・水道が復旧し、生活道路が開通しなければ帰れないのです。帰るめどが立たないのです。

今一番の心配事は、雪の心配と道路が何時開通できるか、果たして元のところに住めるか等先の見えない所にあります。長期にわたる避難生活が余儀なくされることとなります。

地震直後は、食べることに寝るところの確保が大切でした。広い体育館で村のみなさんと寝起きを共にしていたわけですから、プライバシーは守られないかもしれませんが、話し相手もいた、食事も自衛隊やボランティアが作ってくれてみんなまで食べた。体調が悪いとすぐわかるという利点がありました。開口一番「とっても良くして頂いてありがたい」という気持は、つらさを我慢していたとも考えられますが、不安を解消させる何かがあったのではないのでしょうか。

一人のお婆さんが、子どもは遠くにいるが、行こうかどうしようかと迷っているようなことを話したら、隣に座っていたお婆さんが「こっちにいなよ。子どものところに行ってもいいことないよ。山古志で暮らしたほうが自然もあるし、みんながいるじゃないの」といって励ましていました。

お年寄りには住み慣れたところが一番いいのは、自然だけでなく、地域のコミュニケーションがうまくいっているのだと思いました。

老夫婦や独り暮らしの方は、避難所では大勢でいることの安心感、話し相手があった、話を聞いてくれる人がいたことは、精神安定にも繋がります。阪神淡路大震災を教訓にして、地域でまとまっていますから、災害に遭っても「地震なんだから、仕方がない」と笑顔を見せていたのでしょう。

いま仮設住宅190戸入居が始まりました。2・3日内には300戸、一週間のうちには350戸引渡しの予定です。被災地に3,500戸が出来る予定です。

これから仮設住宅で生活することになりますが、問題はこれからではないでしょうか。地域コミュニティが巧く機能し、集会所があっても、家から一歩外に出ないと人に会えないのです。閉鎖的な人、人嫌いや出不精の方はどうしたらいいのでしょうか。

生活面では、今までは畑から野菜を持ってきて料理を作っていました。これからはスーパーなどに買出しに行かなければなりません。また、いままで通院していた病院がどうなるのか、生活に慣れるには大変であり、高齢者にとっては非常に難儀なことになると予想されます。

長岡市はそうした問題解消のため、集会所にヘルパーや職員を配置してサービス・相談システムを作りました。

支援活動も時間が経つと変わってきます。当初は食べる、寝るが緊急でしたが、今は心のケア、健康管理が大切となりました。

報告の後、友愛活動の一環として、被災地の方に勇気づけに「友愛の手紙」を会場の皆さんに提供してほしいと事務局から話がありました。

私は避難場所を訪問したとき、送られてきた手紙や絵手紙が壁に貼ってあるのを見たとき、きれいだなー、多くの方から励ましがあつて、見捨てられていないという思いがありました。ですが、個人にとって勇気や元気がでる力が手紙や絵手紙にあるのだろうか？ 余震に怯え、疲れきっているところにありきたりな儀礼的な手紙をもらっても嬉しくない私は思ったものですから、事務局長さんに

「友愛の手紙は嬉しいのですが、被災された個人個人に渡すほどの数がいただけるのですか。集会場や避難会場に貼るだけならあまり効果はないように思います。

また、見ず知らずの他人から、今まで頑張ってきた上にまた“頑張ってください”と言われても、頑張れなかったらどうします。落ち込むばかりです。」と言うようなことを話したら、大変ひんしゅくをかいました。私が長岡に帰って来ないうちに、県の事務局へ連絡が入ったと後で聞きました。

あの時、今一番欲しいのは友愛の手紙でなく、お金だと訴えたかったのですが、そこまでは言えなかったのです。

その後たくさんの方の手紙や物資が届きました。分配するのに大変でした。

貰ったら返事を書けとまで言われたのも私の頭にきた理由の一つです。確かに手紙を貰ったら礼状を出すのが礼儀かもしれませんが、現場を知らない遠いところの机上の考えであるように感じました。

メール・再び

3月1日

*しばらくご無沙汰しました。最近の話しを聞いて下さい。

このところすっかり平常に戻った生活ですが、いろいろなところに新たな問題が出ています。

*70代後半の男性は、世帯主として家族を守ってきたけれど、家は大規模半壊

と認定されました。同居の娘婿はこの際だから新しく家をつくることにしました。家の主導権は若手にいくことになり、男性は世帯主としての居場所がなくなるのではないかと「寂しい」と言っていました。

- *家を建て直す財力はないが、いままで住んだ家から他に移りたくないという高齢者が多くあります。こうした見えない精神的なものがあります。毎日報道されている楽しい場面、慰問を受けて有難うという場面から置き去りにされやすい精神的なダメージを癒す場がないのです。カウンセリングや特別な場でなく、誰かと話すことで、恐怖や心配ごとを共有してあげられるのではないのでしょうか。話すことで癒されることありますよね。

3月3日

- *地震から4ヶ月が過ぎました。蓬平地区の仮設住宅を訪問しました。仮設に入って不便はないかと聞きましたら、部屋が狭いとか、結露が出る、病院が遠くなったと言っていました。買い物は、週に二回移動販売車がくるからそう不便ではないといいます。地震被害を悲惨だと嘆くことなく、思いのほかみなさんは朗らかでした。雪が解けなければ何とも言えない。それまでは、現状をプラスに受け入れていくしかないと言っています。隣近所でお茶飲みの楽しそうな声を聞いて、なにか安らぐものを感じました。これは表面的なものかも知れません。地震直後村を出てから一度も村に帰っていないからどうなっているのか分からないのです。雪が解けて現実の被害状況を目の当たりに見るまでの短い時間を少しでも希望を待って生活してほしいと思いました。

3月8日

- *山古志の仮設住宅にお伺いしたときの事です。老人クラブ会員のお宅に慰問の品を届けました。お留守の家が何軒かあり「何処へ行ったんでしょうね」と案内をしてくれた地区の会長さんに尋ねました。次の家に行ったらみなさんでお茶飲みをしていました。「いつも集まっているんです。さあ、上がってお茶飲んでいってください」と声をかけられました。普段と同じ暮らしを仮設でもしているんだと思うと「よかった」と安堵しました。

3月24日

- *小千谷の仮設で孤独死があった後、山古志の皆さんと交流会をしました。隣に座った男性にそれとなく聞きましたら「山古志では、阪神淡路大震災の教えに従って、独り暮らしの方を挟んで住居が配置されているから、小千谷のようにはないだろう」と言っていました。
- *山古志の人たちに接して、どうしてこんなに元気なんだろう、明るいんだろうかと不思議に思いました。村長さんの行動力と全国からの支援が報道されて、何時も誰かに見守られているという思いが『へこたれていられない』という気持ちにさせるのでしょうか。とても元気がよかったです。

私の7. 13水害 その後の対応について



長野 洋子
(三条市・緑ヶ丘)

三条市の水害対応マニュアル

7月15日午後1時25分、私と甥は五十嵐川にかかるすべての橋が交通止めになっていたので、国道8号線を迂回してようやく我が家にたどり着くことができた。

普段は車で20分もあれば嵐北の実家から嵐南の我が家までは到着できるのに、途中道路は渋滞し、あちこちで泥水をかぶった車が放置され、まだ地下を通る道路には泥水がたまっていた。

自宅に来てみると玄関の鍵はきちんとかかっていたし、家の周りはさほど普段と変わっていなかったが、家の鍵を開けると下駄箱の引き戸は外れ、中の履物は玄関に散乱していた。

泥水が畳を押し上げたのだろうか、部屋の中ではテーブルや家具のないところの畳は、浮いてから水が引くときにずれたのだと思うが、そのまま落ちて畳が2枚重なっている。台所では食器戸棚のなかの瀬戸物類は泥水が入ったまま、梅干のかめにも泥水が入っていた。冷蔵庫、流し台とあらゆるものが床上70センチ～80センチくらいのところに泥水をかぶった跡がくっきりできていて、何から手をつけていいのかわからないのか、どうすればいいのかわからない、立ちすくんでしまった。

私は毎日嵐北（市内を流れる五十嵐川を挟んで北側を嵐北といっている）にある実家に母の介護に通っていて、自分の家が浸水していることを14日の午前中に隣人に電話で確認して初めて知った。もちろん、13日はすべての橋が交通止め。自宅に戻れずそのまま実家に泊り込んで、テレビやラジオで情報をとろうとしたが、あまり詳しいことはわからなかった。15日午前中に水が引いたと聞き、渋滞覚悟で我が家に来てみると上記のような状況であった。

あれから8ヶ月、自治会の皆さんや知人、友人の励ましと協力で何とかあのごみの山と格闘し終えて、ようやく住めるように補修してもらい畳が入ったのは10月中旬頃である。

そして、10月23日の中越地震である。

この震災では幸いにも我が家は風呂場のタイルの上の壁にひびが入った程度で大したことはなかった。しかし、震源地の川口町を初め、中越地方の各市町村は大変な被害であり、被災された方々の様子を見ると身につまされる。連日その報道ばかりである。

その報道に埋没して見落されがちではあるが、今、新潟県7. 13梅雨前線豪雨災害（7. 13水害）を受けた三条市では災害に強いまちづくりに向けて取り組んでいる。

取り組む内容は次のようなものである。

1 市の災害対応活動

- 2 五十嵐川の河川改修事業
- 3 水害対応マニュアルの作成
- 4 防災情報広報システム
- 5 地域防災計画の見直し
- 6 ハザードマップの作成

それぞれの内容を詳しくここに掲げる紙幅はないが興味関心のある方は「広報さんじょう(2005/03/16号)」をごらんいただきたい。そして、なるべく多くの意見を庶務防災係に提言してほしい。もっとも水害対応マニュアル(素案)は市民編、自治会編、自主防災組織編、民生委員編、職員用・総括編、災害対策(警戒)支部編の6部に分かれており、意見の募集期間は3月16日から25日までの11日間である。かなり強い関心を持たなければ、いくら水害に遭ったとしてもあまり意見は出てこないのではないだろうか。

なぜなら、募集期間が短すぎる上にそれぞれ各編の突き合せが必要であり、各自治会で市民の意識の浸透を図りながら「いざというとき」をイメージしながら話し合うという作業が欠かすことができないと思う。にもかかわらず、自治会単位でそのような会合が持たれたということを知らない。関連して自治会などで水害あるいは災害のために用意しておかなければならない機材などの常備の必要もあろう。そうしたことは、5月1日に栄町・下田村と合併する予定なので、合併後にそうした準備がなされるのだろうか。

私見ですが・

水害対応マニュアルが正式に確定するのは5月1日以降らしいのだが……。

私自身がこの素案を見てこれで大丈夫だろうかと思うことをここに書いてみたい。

今まで三条市には同報系防災無線システムがなく、7.13水害が発生したとき、市民や企業などに災害情報をお知らせする手段がなかった。そのために被害が大きくなったという指摘がある。そこで、「合併する栄町・下田村と共同して防災無線システムなどの防災情報広報システムを構築する」のだという。「3市町村合計で約180ヶ所に屋外スピーカーを設置して周知を図り、…さらに防災情報の伝達を行うために自治会長・民生委員には屋内受信機を設置する。」とある。

3市町村あわせて432.01平方キロメートルにも及ぶ広範囲な地域に180ヶ所程度の屋外スピーカーで十分だろうか。もちろん広報車を出して市民にお知らせするというが、気象条件によって聞こえなかったり、家の中でテレビやラジオを聴いていると気づかなかつたりで、正確に周知されるのかどうか、絶対に大丈夫という安心感は得られない。

確かに自治会長・民生委員には災害情報を地域住民の方々へ知らせていただくためにそれぞれの屋内に専用受信機を設置するとしていることは、今までなかった装置がつくことから一歩前進のようだが、各家庭に受信装置がなければその効果のほどは期待できないのではないかと。

100年に1回ぐらいの頻度では全世界帯に受信装置をつけるのは予算的な面で無理があるかもしれない。しかし、数年度にわたって計画的に設置することをその視野に入れてもよいのでは、と思う。

なぜかといえば、五十嵐川の改修工事は現在仮堤防が完成しており、本格的な改修工事は5年間で仕上げるのだということである。だとすれば、そういうハード面ばかりではなく、災害時の情報システムも5年ぐらいで計画的に取り組み、各家庭に受信装置が設置されることが望ましいと考えるのはむりだろうか……。

もちろん、今回のマニュアル(素案)によって専用受信機を設置された自治会長は自治会内の組織を使って区域住民にお知らせされると思うのだが、ひとつの自治会の世帯数はまちまちであり数百世帯に及ぶ自治会もある。各家庭への周知は容易ではない。留守だったり、出先がわからなかったりと……。

民生委員は市に協力する立場で、災害のときに自らを守るために安全な場所に避難できない、あるいは適切な防災行動をとることが困難な人(要援護者)に対して避難準備情報が出たら避難行動に移れるようお知らせするという役目を負わされている。近所の人たちや自主防災組織の方々との連携が必要となるが、これとても一人の民生委員が要援護者の避難にかかわれるのは限度があるのではないかと。

災害時要援護者の範囲がマニュアルに掲げられているが、事前に本人あるいは家族の了解を得て名簿に登録するという前提ではある。だが、プライバシーの観点から十分そのことが機能するの不安もある。

名簿に登載された要援護者が関係機関によって共有され、いざというときそれをもとに連携して救助活動に当たるということは、他人に知られたくない部分で当事者の意思にかかわらず公にされてしまうという危険性があることと本人または家族の了解をあらかじめ得ておくというが、その同意はいつまでかという期限もある。1年に1回ぐらいずつ確認するのか。これは今後のマニュアルが確定するまでの間にきちんとさせていかなければならない項目だ。

避難所におけるプライバシー保護を少しでも守ろうとダンボール製の間仕切りを加茂市のメーカーが開発し、試作品を完成させたと3月26日付け新潟日報が報じている。避難所の中で「人目を気にせず着替えや授乳をしたい」「寝顔を人に見られたくない」など長期にわたる避難所生活ではこうした切実な声があがり、その解消を図ることが求められる。災害時の緊急備蓄物資の中にこうしたダンボール製などの間仕切りを必需品として位置づけるべきではないか。

そのほかにもこの水害対応マニュアルについては、細部にわたってきちんと検証しなければならないところがあるのでは、と思う。天災は忘れたころにやってくるのだから……。

それから、被災した一市民という立場で7.13水害が天災か人災かなどという議論を展開するほどの知識は持ち合わせていないが、五十嵐川の上流には2つのダムがあり、川の水が溢れる……ましてや堤防が決壊するなどということは、夢にも思わず、今までこの地で39年間生活してきた。まして2階のない我が家にとっては、押入れの上段にあったものが水害からまぬがれただけである。

残念なのは、思い出のアルバムや現役時代の自分の足跡ともいえる数々の資料、蒐集した女性政策や女性学関連の文献など、北京会議に参加したときのものなどをすべて失ってしまった。やはり人間は自然の中で生かされているのだと感じずにはいられない。立ち直るには命あってこそと自分で自分を励まし、今後は丁寧に自分を生きていこうと思う。

私の被災体験 ～原発のある町から～



関根 富紀子
(柏崎市・柳橋町)

他人事がわが身のことになった

さして大きな被害も被らなかつたわが家です。しかし、周りの人たちと話し始めると、そこではいろいろな被災体験が語られます。大なり小なり新潟・中越地震を体験した人100人には100の被災体験があり、100の語りつくせないドラマがあるのです。言葉では表しようのない悲惨な被害を受けた方々に比べ、さしたる被害も被らない者が体験を語るには、おこがましいような、申し訳ない気も致します。

物理的な被害はほとんどなかつたとは言うものの、あの最初の襲撃の揺れと繰り返してやってきた余震は生まれて初めての体感であり、経験でした。今まで大地震の様子や防災準備の重要性など、いろいろ見聞きしてきましたが、やはりそれは他人事でした。わが身のこととなると、まるで別の話になってしまうのです。

先日、東京の友人と京都に行きました。古いブロック塀や今にも落ちそうな瓦屋根のそばを通る際、何時の間にか小走りになっている私を見て、友人たちは笑いました。「かなりトラウマ状態ね」とも言いました。その諸々と原発のある町でナーバス状態が続いた一市民の感想や思いをアトランダムに報告いたします。

予想されていたことだけど忘れた頃にやってきた

「災害は忘れた頃に」という言葉は誰でもが知っている教訓です。にもかかわらず、いやというほどそのことを思い知らされました。春夏秋冬、猛暑の夏、豪雪の冬、長梅雨の季節、台風が暴れている時、一日の中でも早朝、昼間、深夜と時を選ばず、突然大地が大揺れに揺れるのです。地震予想はかつてに比べ、大量にメディアで報道されています。天気予報のように今日明日のことではなく、1分後、1月後、3年後、10年後、100年後なのか定かでない。やはり「忘れた頃に」なるのです。確かに中越断層のことは、テレビで報道されたのを見た覚えがあります。あの揺れの瞬間「あっやっぱり・・・」と思いました。即ち今、危険が予想されている地域は、必ず地震がくることは確かです。危険度が低いといわれていた福岡にさえやってきた地震。もう今では日本列島どこにでも地震がくるのだという覚悟は全ての人に必要です。個人的にも他人事ではない私たち一人一人の防災準備も問われます。

家族は常に一緒にいるわけではない

日常的には超高齢の2人(93歳と87歳)とわが夫婦との4人、そして2匹の猫と暮らしております。家族の平均年齢76歳の老ファミリーです。あの時夫は長岡駅で家にいるのは3人、ちょうど夕食の準備中で台所にいました。グラグラときた時は茶箆筒とテーブルで体を支えながらガスの元栓を閉めるのがやっとでした。その後、2人の部屋に行くか行かないうちに次の揺れ、瞬時に停電し

ました。杖をつかなければ歩けない1人と手をつないで支えなければ歩けないもう1人。私1人では2人を一度に連れ出すことはできません。思わず座布団を2人の頭に乗せて揺れが落ち着くのを待ちました。幸い上から落ちてくる物もなく、そろりそろりと懐中電灯を持って、ご近所の駐車場に避難し、周辺の人たちとしばらくの間ご一緒しました。家が壊れる気配もなく、寒さにも耐えきれず三三五五と真っ暗になったそれぞれの家に帰りました。運良く夫は長岡駅からタクシーに乗って、普段は50分ぐらいの距離を3時間以上かかって帰って来ました。

家族は常に一緒にいるとは限りません。1人の時、2人の時とその時の顔触れによって、さてどのように避難をするのか、いろいろなシチュエーションを考え、避難先までいかにして移動するか、方法や手段を家族全員で共通の認識を持つことは絶対必要です。

移動困難な高齢者や障害者の避難先、避難方法、避難体制、そして支援体制はどうなっているのでしょうか。個人的にできることは当然のことながら、自治体の防災計画や避難対策は今回の大地震の経験を機にして、見直しがされるべきです。その時に高齢者、障害者、女性の視点で見直されるか、またそこから発信される要望や提言がどのように取り入れられるのか、私たちには市民として注意深く見守る義務も役割もあるはずです。そしてこの経験の中から地域の課題を提言できる市民として力をつけること、長岡を拠点にして学習活動をしている私たちの重要なテーマです。

大切な人たちに無事を伝えたい

大揺れが一息ついてすぐに、夫や息子、その他私たちが案じてくれる人たちの顔が浮かびました。暗闇の中で試みましたが、電話はもちろん携帯もすべてアウトでした。息子からの携帯メールだけは届きました。息子に無事であることを連絡できたのは一安心でしたが、その時の連絡手段は携帯メールのみでした。わが家のように高齢者家族には携帯メールを使いこなすことはできません。次の日に電話は回復しました。回復しても安否を問う知人友人からの電話はかなり長い間通じなかったようです。

翌日には電気もガスも使えるようになり、テレビでは全国レベルのニュースで刻々報道され、長岡や小千谷に比べ、私の周辺の被害がたいしたことなかったことを知りました。と同時に友人たちの安否が心配になってきました。しかしその安否を知る手立てが何もなく案ずるばかりで、時間が過ぎていきました。時にこだわらず個人的な連絡、情報交換を可能にする電話、携帯、パソコンが全て使用不能になるという経験をしました。あの時は運良く携帯メールが使えましたが、どんな時でも大丈夫とは思えません。停電が長引けば、充電ができなくなりますし・・・。日頃便利に使っている文明の利器(?)に依存する私たちの暮らしの脆弱さをしみじみと実感させられました。話としては当然知っていたことではありますが、「その時どうする?」を個々人で考えながら、それ以外の連絡手段を持たなければならないのです。さてどういう方法があるのでしょうか。

避難所暮らしをした友人から聞いた話です。携帯を充電するための機器が備えられ、多くの人が利用したそうです。充電するには結構な時間がいらいます。その間にいくつも携帯が盗まれたとのこと、嫌な話です。

世界一の原発のある町に大地震がきた

柏崎市は東京電力の原子力発電所があることで有名です。世界一の規模だそうです。建設時代から数えて30年以上の時が過ぎました。原発のない町を想像できないほどの長い時間です。その間、町中くまなく広報がいき届くように、戸外のあちこちにスピーカーが取り付けられ、そして今では全世帯に防災無線が備えられています。防災無線が各家庭にあることの威力を今回ほど感じたことはありません。町の地震情報、ライフラインの回復状況、避難連絡等々をたえず流してくれました。最初の大揺れの後、しばらくして聞こえてきたのは市長の「原発は異常ありません。市民の皆さん安心してください」というメッセージでした。原発はどうなったのだろうと揺れる中、一瞬頭をよぎったのですが、高齢の二人をどうしようという方にとらわれ、それどころではなかったのです。もしあの時、地震が原因で原発から大量の放射能がもれるような大事故があれば、と想像するだけに身がすくみます。無知な市民の妄想と言われるのは承知のことですが、もうこれはしかたありません。柏崎市に住む市民の宿命です。市長の声で一安心という感じはありませんでした。むしろ防災無線から市長の声が聞こえてきたという事実がショックで、紛れもなく原発のある町の防災無線であるということを実感しました。その後強い余震で一基の原発が止まりました。止まったということは、安全装置が働いたということですが、やはり不安感は消えませんでした。

それとまた別のエピソードがあります。最初の頃、柏崎の震度がテレビで報道されないということがありました。最初の大揺れ直後からテレビでは震度と関連市町村名がテロップで繰り返し流され、後は余震がくる度に同じようにテロップが流れました。わが家は次の日からテレビが映り始めましたが、柏崎の文字だけは目につかないということが続き、周辺からも「何か変、原発のせいでは？」という声が聞こえてきました。そして遠くに居る姉弟、友だちも「柏崎はどうなっているの？」と思ったそうです。そのことを友人と話すと、「マスコミが自治体を報道する場合の順番リストがあり、柏崎は後半に位置付けられている」という説明を聞きました。報道する市町村があまりに多く、なかなか柏崎の順番にならなかったということでしょうか。でも山古志村、小千谷市、長岡市、の次のランクぐらいの震度だったのに、と思うと納得いく説明ではありません。むしろ意図的なものを感じました。同じように感じた市民の投書が地元新聞に載ったりするうちに、ある噂から余震のたびにそれなりの順番でテレビで報道されるようになりました。

今でもあの時は配慮というか、情報操作があったのではとっております。かつての東京電力の事故隠し、その折の国のチェック機能のあいまいさを知ってしまった後は何かにつけて、疑心暗鬼の思いになってしまいます。さりとて原発のこと、安全装置のことについての科学的知識などはほとんど持ち合わせておりません。理屈抜きで陥る精神状態なのです。地震で原発がストップしたなどを聞くと、やはりナーバスになりました。この状態はしばらく続きます。原発の町、柏崎に住む者ならではの話です。

ボランティア情報から

小林 博子
(巻町・赤縮)

文化祭の前日で準備のため、6時過ぎに帰宅した。車庫のシャッターを開け、車をバックさせ車庫の中程まで来た時突然それは起こった。自分自身が病気になったのかと一瞬錯覚した。しかし、違う。車が揺れている。何が起きたのだろうか？車の中から周りを見る。風でもない。そしてゆっくりと揺れは収まっていった。

とにかく車を車庫から出そう。そう思って前進させ、車から降りてみた。隣家の地面が揺れている。なんだ地震か。そう思ってほっとして、再度車をバックさせ、家の中に入った。着替えて、夕食の準備に台所へ立ってスパゲティを茹でようとガスに火をつけてちょっとその場を離れたとたん、また揺れてきた。大したことはないし流し台に掴まっていたがだんだんひどくなり、火を止めてテーブルに掴まりながら、椅子に腰を下ろした。それもそんなにひどく感じないまま終わった。即テレビをつけてみたが、どんな報道をしていたかはよく覚えていなかった。そこへ、下の息子から電話がきた。「地震どうだ？」と言う問い合わせ。家は何ともないので心配ないと話したら、息子は国体で埼玉県に居るといふ。埼玉もかなり揺れたようだ。息子のアパートは長岡市中貫町のため、被害状況を見てきてほしいということであったが、次の日は私も夫も文化祭のため出勤日。すぐには行っていられないと話し電話を切った。しばらくして、再度3回目の地震が来た。もう地震とわかり、何も慌てることもなく椅子に腰を下ろし、収まるのを待って夕食の準備をして、夫の帰りを待っていた。

そんな時、長男から様子を伺う電話がきた。長野に居る長男のところも少し揺れたが、何も被害は無いと言っており安心する。

その間にも地震のニュースが放映され、中越地区の悲惨さが映し出されていた。大変なことになったと思えば長岡の実家に電話を入れるが繋がらない。あきらめてほっておいたら、逆に群馬や青森の知人から大丈夫かと電話が入った。新潟でも私のところは何ともなかったと話し心遣いに感謝した。

夫は7時過ぎになって帰宅した。翌日のバザーの仕込みをしてあったので、それをどうするか検討をしていたようだ。結局当日は火を使うことをあきらめ、カレー等はすべて処分することにした。翌日の余震からすれば当然の判断だったと思った。

文化祭当日はほとんど何事もなく済み、平常な状況だった。月曜日文化祭の代休のため、とりあえず、息子のアパートを見に行くことにした。

途中のコンビニでお昼を買っていこうと入って驚いた。パンやおにぎりがほとんど無い。改めて地震の大変さを感じた。長岡の東バイパスを降りるまでは被害もほとんど感ずることなく走っていった。バイパスを降り、中沢のあたりに来たとき、道路は通れない。迂回してみれば道路の至る所に亀裂が入っており、亀

裂やアスファルトの盛り上がりにより車を擦らないように進めながら、ようやく息子のアパートに着いた。外見はあまり被害を感じなかった。しかし、中に入ってみたら、家の中のあらゆるものが倒れたり、傾いたりしていた。雨戸が開いていたり、鍵がはずれていて、おかしいなと思ったが、地震で家が揺れたために鍵がはずれたり、戸がはずれたことに気がついた。電気も水道も来てなく、掃除も思うようにできないため、とりあえず倒れているものを起こし、衣類等を袋に詰め、家に持ち帰ることにした。外に出て、隣家の人たちと話をしてみると何処もみんな家の中はメチャメチャのようだ。電気も水道もガスも来ていないため、手をつけることもできないと嘆いていた。

息子のところは、とりあえず掃くだけの掃除をし、また余震が来てもいいようにある程度整えて実家に行ってみた。玄関の前が少し下がって、棟の一部が下がっていた。

母は、呆然として一番被害の大きかった座敷に座り込んでいた。とりあえず怪我がなかったことを喜び、次に友達の家に向かった。こちらの方もとてもひどく、道路の至る所に亀裂が入っていた。ようやく友達の家に着いたが、あまりの酷さに声もない思いがした。何回か声をかけたが、誰も居ない。どこかに避難しているのかなと思ったら、隣家から人の声が出て、行ってみると息子さんが呆然とした様子でメチャメチャになった家の中から声をかけてくれた。お母さんはどちらかと訪ねるとお昼で避難所にいるということなのでそちらに歩き始めたところで友人に会うことができた。なんと声をかけて良いか解らなかった。とにかく怪我等が無く安心したこと、頑張ってもらってほしいと伝えて、帰宅した。その後も何回か余震はあったが、我が家は全く正常な生活が続いていた。一週間後に再度息子の家の様子を実家の様子を見に行った。実家はやはり家には居られなく、最初姉の家に世話になっていたが、アパートに入ることにした。そのため、家の修理をするためにじゃまになる父や母の荷物を我が家に持ってくることにし、息子のマイクロバスに積んで運んだ。

地震が起こって、すぐにメンバーに連絡を入れたが、なかなか連絡が取れなく心配が続いたが、少しずつ情報が入り、とりあえず皆さん無事なことがわかり嬉しかった。

いろんな情報が入ってくる中で、とても気になったことをいくつかあげてみたい。

メールの情報から

こんにちは、平戸@阪神大震災元ボランティアです。

雲仙でも奥尻でも阪神でも、大量の物資を焼却するのに多額の費用がかかっています。数千万円以上かかっています。ボランティアが仕分けばかりしていて全然届きません。やめてください。これは災害救援の常識です。物資を送るのはやめてください。

参考のために情報を一つ転送します。あなたの送った物資は外に山積みで配布されていません。役所や行政やボランティアが悪いのではありません。その余裕がないのです。

10/26

小千谷市役所、小学校での救援物資の配給や、炊き出しなどを手伝っています。現場はまだまだ混乱しているし、人出も足りていません。そんな状況下で、マスコミの取材陣が50人近く現場付近を陣取っています。小千谷市役所の正面に車を止めて。そのために、救援物資を運ぶトラックは遠くに止めることしかできず、ボランティアの人たちがせっせと現場に物資を運んでいます。報道陣は、それを手伝う気配すらありません。

心労と肉体的疲労が積もっている被災者のかたがたに、当然のようにマイクを向け24時間カメラをまわし続ける神経もさっぱり理解できません。

現地では今、「大人用の紙おむつ」が不足しています。「赤ちゃん用の紙おむつ」は足りています。あとは、トイレが使えなかったり、下着を替えられなかったりするので「パンティライナー」があると重宝しますが、こちらではもう品切れで手に入りません。P&G、花王、ネピアなどの紙おむつメーカーに電話をして、現状を伝えてください。

夜の寒さが厳しいです。お年寄りを使い捨てカイロをもむことすらできないので、「貼るカイロ」が必要です。マスコミの仕事は、こういった情報を伝えることだと思うのですが？

今日はこのあと、小千谷小学校に小泉首相が来るということで、マスコミ報道人の数はさらにふくれあがり、「毛布の配給ができないので、小泉さんが帰るまで待つように」という連絡が入りました。

何のための視察なんでしょう？

午前中にも、数名の政治家さんが小学校に来ましたが、トイレはどこかとたずねられ、仮設トイレを案内したところ、「わたしに仮設トイレを案内するつもりかね？」と、言われたそうです。いったいこの国は、どうなっているんでしょう…。

現地では、大人用の紙おむつと、パンティライナー、貼るタイプのカイロを必要としています。

これらの商品を販売している企業の「お客様相談室」宛てにメールを送ったり、電話をかけたりして、「小千谷市の被災者が求めているもの情報」を、伝えてください。

あなたのblogやHPの中で、ただ伝えるだけでかまいません。皆さんの声が企業を行政を動かします。マスコミはたよりになりません。マスコミへは、支援活動の妨げとなり、被災者の心労を倍増させる今の取材のやり方についての、抗議の声をあげてください。

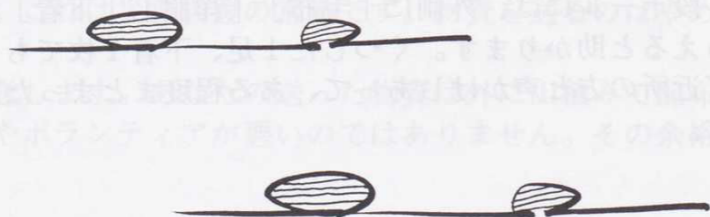
あまりにひどい状況です。小千谷市にも、続々と個人の方からの救援物資が届いています。ありがとうございます。しかし、それを種類別に分けて、配布する人手がありませんので、以下の点に注意して送っていただくと大変助かります。

段ボールには、外側に「毛布」「洋服」「下着」など、中身を大きく書いてもらえると助かります。くつした1足、下着1枚でもうれしいのですが、できれば、ご近所の方と声かけしあって、ある程度まとまった数があると、とても助かります。

このメールに情報会員の方から声上がり、たくさんの物資を送っていただきました。
現場に行けない者としては、報道による情報しか解らないが、現場にいる方たちのいろんな思いに心を配りながら報道を聞く・見るという情報リテラシーの真の意味を理解する必要性を深く感じた。

ボランティアに行かれた方の声

- 被災者の方たちのプライバシー保護のないことに驚いた。特に女性たちの着替えや授乳施設もない状況に声もなかった。阪神淡路大震災の避難所では段ボール等で間仕切りをしていた様子を見たことを思い出し、地域性か人間性かと考えさせられた。
- 高齢者の方たちの謙虚な態度に歯がゆささえ感じた。
うどんの炊き出しをし、どうぞ食べてください。と言ってもなかなかいらっしやらない。お椀を渡すと押し頂いて食べてくださる。新潟県人の人柄と受け取ればよいのだろうかと思った。
- 報道関係者の横暴さに驚くばかり。
良い映像、報道をしたい思いは解るが被災者の身になって取材をしてほしい。カメラやマイクを向けられれば、話さないわけにもいかないし、大変さを話すしかないが、何処まで本心が語れるのか。一部のみの報道に終わらず、いろんな場面を報道することも必要ではないかと考えさせられた。
シリーズで現地を追う報道も大切だが、報道されない地域と支援に格差が起り得ることを考え、同じ被災者に対する心配りの必要性を報道関係者に求めずにはられない。
- ボランティアのあり方にも疑問
水害のボランティアも大変だったが、震災の場合、あまりにプライバシーがさらけ出され、ボランティアをする側とされる側の気配り心配りの必要性を感じた。
- 新潟市のあるボランティアに行かれた女性たちに自分のお昼は自分で用意してきてほしいと伝えて現地に行った方が、お昼になり、昼食を広げたら、なんとピクニック弁当であったという。現状をどう考えての弁当だったのかと常識を疑ったと言う。



ありがとうございました。

この度の7.13水害には皆様から早速にお見舞いと励ましを頂きまして本当にありがとうございました。厚くお礼申し上げます。
2階のない我が家に取りまして、床上70cmの被害は大変厳しい状況となりましたが、幸い、私は無事でした。その後は復旧に追われており、まだ、不便な日常生活ではございますが、体に留意しながら過ごしております。

本来なら、会員の皆様お一人お一人にお伺いしてお礼を申し上げねばならないところですが、情報通信の紙上をお借りしてお礼を申し上げることをお許しください。いつか皆様にお会いできる日が来て、ゆっくりお話できることを念じております。

最後に重ねて申し上げますが、本当にありがとうございました。

(情報通信90号 2004.8.23 長野洋子)



新しい年が明けました。あの「新潟県中越地震」の傷跡が残る現状を見ますと「おめでとうございます。」とはとても言い難いのですが、あえて、2005年が良い年でありますようにと祈りを込めて、この言葉を申し上げます。

昨年のウィメンズは受難の年でした。7.13の水害に続き10.23の大地震。メンバーの多くの者が被災しました。

家に入れず避難生活を余儀無くされた人、被災直後から避難所の責任者として指揮をとった人、ボランティアに力を尽くした人、手薄になった職場を守った人、老いた親のため自宅で踏ん張っていた人、メンバーの安否確認に駆け回った人…。様々の状況の中で、よくぞ頑張ってきた！とそれぞれを褒めてやっていいと思うほど皆が必死に毎日を生きてきました。

地震発生後いち早く、全国から激励の言葉が寄せられました。なかでも、11月に計画していました「公開講座」の講師を引き受けて下さった井上輝子先生の優しいお言葉には感謝しております。まだ被害の全容が見えていない段階で「公開講座」の中止を決断したのですが、会場に予定していた中央図書館も避難所となり以後長い間利用不可能となったことや新幹線が不通となったことからして、中止の判断はやむを得ないことでした。

会の発足以来休むことなく続けてきた定例の「学習会」や「公開講座」を行わないということは、とてもさびしい思いがしました。会の活動に対して常に意欲的であったとは言えない私ですが、会のスピリットが長い間に私に浸透してきているのだな、と改めて感じました。

12月11日土曜日。この日、9月の定例会以来はじめてメンバーが顔を合わせました。当初は互いの無事を確認し合いランチを一緒にするだけのつもりでしたが、あたたかいご馳走とワインも一口づつ交わしました。久しぶりの盟友との語らいに花が咲き、気の置けない仲間同志たくさんお喋りをして明日への英気を養いました。

その折り、ウィメンズの口座に寄せて下さった大勢の方からの義援金を長岡地域メンバー全員が頂戴いたしました。一瞬にして恐怖の中に落とされ度重なる余震に怯えていた心に、支えてくださる多くの方たちのあたたかい気持ちが伝わり、感謝の気持ちで一杯になりました。本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

私ごとですが、あの日以来、被害の少なかった長男宅で避難生活を続けておりましたが12月23日、二か月ぶりに自宅へ戻る事ができました。応急修理が済んだだけの家は、柱が傾き床も歪んだままで安心・安全とは言えませんが、適当な所で折り合いを付けてこの家で暮らしていこうと思っています。

ウィメンズスタディーズ・ネットワーキングの2005年の活動は、定例の1月の「学習会」からスタートいたします。大勢の方からのご支援と期待に応えられるようメンバー一同張り切っています。これからもどうぞよろしく願っています。

ウィメンズスタディーズ・ネットワーキング代表
(情報通信93号 2005.1.7 鈴木千栄子)

語り合おう“あの時”のこと…

～2004年10月23日新潟県中越地震～

実施日：2005年2月19日（土）

会場：ながおか市民センター

参加者：26名（うち男性1名）

初めて体験した大きな災害で、女性たちが感じたこと、気づいたことを、参加者全員で一つの円になり、それぞれの思いを語っていただきました。そこから見えたこととは？

Q1) 災害のときあなたは？

[どこで被災しましたか？ 誰と一緒にでしたか？ 被災の生活の場所は？]

《 家族と家に… 》

・夫と家にいた。地震後は保育園で一泊したが、夫も私も視覚障害者だし、病気がちなのでその後はずっと家にいた。(60代)

・家族と一緒にだった。たいした被害もなくみんな無事だった。(40代)

・夫婦二人で家にいた。自分は四つんばいになり揺れに耐えていた。夫は食器棚を押さえていた。停電しなかったのずっとテレビを見て情報を得ていた。翌日からは日中一人でずっとテレビを見ながら、余震に耐えていた。近所に知り合いもいないので避難所へは行かなかった。(40代)

・オープンを使って夕食の準備をしていた。息子は2階。最初の揺れで玄関に飛び出たが、自分がどう動いたか覚えていない。食器、油はすべて散乱。瓦がすべて落ち、垣根も倒れた、一気にすべてが壊れた。停電したらしいが、その時のことがショックで覚えていない。(50代)

・台所にいた。夫と夫の弟と一緒にだった。2度目の揺れがすごいので家が壊れると思い、外に出て、電柱をさけて、町内で声をかけ合って、避難所に行った。その後は子どもの家にいた。(50代)

・94と87歳の両親と一緒にだった。ただ二人を守るためにひたすらじっとしていた。(柏崎・60代)

・親戚の葬式後、みんなで家にいた。まず、火を消そうとしても揺れがひどくて消せなかったが、あとでガスは自動で止まったんだと知った。電話をかけたかったが、停電したので通じず、公衆電話を探したがなかなか見つからず、苦労した。(60代)

・90歳の祖母と一緒に。食事をするところだった。祖母は怖くて思うように歩けなかった。地震後、夫と犬は自宅にいたが、私と祖母は避難所に。その後、施設に祖母を預けることができた。私は怖いので、夜だけ避難所に行った。(60代)

・今でもとにかく切ない。息子と家にいた。地鳴り…山が鳴る音を聞いた。その後地震がきた。食器が割れ、停電した。私は対面キッチンにいて、倒れた食器棚と冷蔵庫にはさまれた。出るに連れられなかったが、息子が引っ張り出してくれた。一人でなくてよかった。(60代)

・当日は夫の誕生日でめずらしく夫も家にいた。80歳を過ぎた母はショックでその夜は何も食べられなかった。私は市の職員なので担当の避難所にすぐに行った。もちろん家族のことは心配だったが、その日から18日間ずっと避難所で仕事と住まいを兼ねて過ごした。(50代)

・私の地区はたいした被害がなく申し訳ないようだ。そのときは夕食の準備。まず、スイッチをすべて消した。夫と揺れる棚を押さえるのが必死だった。テレビも落ちたが、みなさんに比べれば被害は少なかったと思う。子どもたちから安否確認の電話が入って、お互い家族どうし励ましあった。外に出てびっくり、瓦屋根の瓦がすべて落ちていた。夜が明けて被害の大きさに驚いた。その後、日中はみんな職場に行くので、一人で自分を支えるのが精一杯だった。テレビを見て確かな情報を得ようと必死だった。(60代)

《 一人で家に… 》

・マンション(12階)で一人暮らし。その日は体調が悪く横になっていた。冷蔵庫や食器棚の中のものが落ちるといふより、飛んだ！エレベーターも使えず、階段も怖いので、4日間一人でずっと部屋にいた。一歩も外に出なかった。(60代)

・一人で台所にいた。夫と息子は買い物に出かけていた。別棟には息子の妻と1歳の孫がいた。隣家のご主人が家の玄関扉をこじ開けて、外に連れ出してくれた。その後は、町内の人と高台にテントを持ち寄って避難していた。(50代)

・こたつの中で横になっているとき揺れた。その後、すぐに散歩から帰った夫がみんな外にいたと言ったが、自分はそんなにたいしたことないと思い、そのまま家にいた。(70代)



《 出かけていた… 》

・娘の住む横浜にいた。マンションの7階だったので、地震のときかなり揺れた。次の日になんとか車で帰ってきた。自宅は無事だった。(60代・男性)

・当日は山形の温泉にいた。次の日、水や食料など買出しをして帰ってきた。家に着くと、冷蔵庫は開けっ放し、テレビが落ちていた。食器は少し壊れた程度。そう大きな被害はなかった。ライフラインもOK。申し訳ないが何の恐怖もなく山形で震度4を体験しただけ。(50代)

・母の入院している病院にいた。家にいる子どもたちが心配なので、母は病院にまかせて、余震の中、すぐ家に戻った。自宅に戻る道中、倒れた電柱や崩れた土砂を見ながら帰った。家は冷蔵庫のものが玄関にあるほどひどい状態だった。子どもたちは公園に避難していた。高校生の長男が中学生の娘をかばったと聞き少し安心した。その日は近所の人がある公園で車中泊した。東京に単身赴任中の夫は翌日の午後やっと帰ってきた。その日からは避難所に行ったが、避難所はケンカする声など、ひどいのですぐアパートを借りた。(40代)

・その日はスーパーで一人買い物中。近くでかなりの高齢者が足がすくんで動けない状態にいた。出るべきなのか、どうしようか考えていたが、その人を引っ張ってやっと外に出た。その後、その方がどうやって帰ったか覚えていない。それだけ自分の中で衝撃があったのだろう。(70代)



《 7月13日の水害の日… 》

・7月13日の水害。朝から雨がすごく、「通うのが大変だから」と社員に連絡を入れ、会社を休みにした。友人から「水がすごいけど大丈夫か？」と電話がきたが、「大丈夫」と言っていた。普段から水が溢れやすい場所だったので、全く心配せずにいた。ラジオで水害情報が流れていたが、「畳ぐらいい上にあげようか」と夫と家にいた。その後、夫は近所の大変そうな人を助けに出て行った。そのうち、水があつという間に腰まであがり、大事な物を何とか持って2階に上がった。

外で右往左往している知らない子ども連れのお母さんを家に入れてあげた。職場にいた子どもたちが「帰ろうか」と電話してきたが、「来るな！ 自分の命は自分で守れ！」と別のところに避難させた。災害を軽くみていた。(三条市・50代)

・私も知人から心配の電話が入っても「大丈夫」と言っていた。昼頃、外を見るとみんなが騒いでいたが、夫が要介護3ということもあり家にいた。でも、近所の工場から泥水が押し寄せ、一気に階段3段目までに入り込んできた。そんな中、必死で夫を2階にあげた。夜、モーターボートが来て救助隊の方が夫をおんぶして避難所に連れていってくれた。(三条市・50代)



Q2) 震災後、感じたことは？

《 家族の大切さ… 》

・一人家にいたが、東京の息子から電話が入ってとてもうれしかった。

・子供たちと無事を確認しあったとき、一人でないことを実感し心強く思った。と同時に、一人暮らしの友人のことが頭に浮かんだ。その友人に「家において」と声をかけた。一人であることの怖さを考えさせられた。

《 ご近所、町内のつながりは… 》

・一人暮らしで4日間ずっと部屋にいたが、誰からも(町内会からも)何の連絡もなかった。もし、私が死んでいても誰もわからなかったと思う。町内会や行政は、一人暮らしの被害状況を聞くようなシステムを考えたほうがいいのでは？

・自分は老人会の会長だが、副会長が会員の安否確認にまわってくれた。今、思うと町内会長がまわるべき？とっている。

・地震直後は、町内全員(27人)で、一人暮らしの高齢者2人をそれぞれ助け出した。避難所は、定員オーバーだったので、町内全員で我が家の庭にいることにした。妙見の近くだったので救急車やパトカー、車で渋滞していた。一人の人が「妻が和名津トンネルにいる」といった。高校生の息子と自分が迎えに行くと言い出した。車はだめなので、歩いて迎えに行くと言ったが、「今は待つしかない」とみんなで沈めて、説得した。私の息子は消防隊員で、「泥棒が多く入っている」という連絡があり、呼び出されていった。こんな時に！と驚いたが、みんなで「盗られるのはしょうがない、命があつてよかった」と励まし合った。その晩はみんなで冷蔵庫の食料を持ち寄って食べた。人のもも自分のものもない生活。一晩中恐怖と戦ったが、町内一致団結していた。

・我が家は今、町内会長。日ごろから災害弱者(一人暮らし、障害のある人など)がどこに住んでいるのかや、各家の事情などを知っておくといざというとき、周囲も助けてあげられるのであろうが、人によってはそういうおつき合いを嫌がる人もいて、どこまでをプライバシーとするのか難しい。

《 避難所で… 》

・私がいた避難所では、怒鳴りあう声が聞こえるなど、殺伐とした雰囲気があつて、精神的につらかった。

・「どういう状況なのか」避難所ではまったく情報が入らず、とても不安だった。携帯ラジオは必須。

・視覚障害なので、一人でトイレに行けないことが不安だった。一度は避難所に行ったが、すぐ家に戻った。同じように障害のある人と一緒の方がよかったと思っている。

・「炊き出し」など避難所によって差があつたようだ。

《 被害の大きさ… 》

・私の地区は大した被害がなく申し訳ないようだ。

・我が家も被害がほとんどなかったのですが、せめてボランティアとも思ったが、何の会も属していないので、どう動いていいかわからず、いま一歩行動に移せなかった。そのことがなんとなく後ろめたい気がしている。みんな大変なのに。

《 メディアは… 》

・地元のラジオ局は細かく地区ごとの情報を随時流してくれてとても助かった。

・被害がとても大きい一部の地域だけが、テレビや新聞で取り上げられている気がする。私たちの地域もそれなりに大変なのに…。

・最近では、地震の報道もあまり取り上げられなくなったが、私たちの震災はまだ続いている。

・確かに新聞の報道には偏りがあるような気がする。「ドラマ性」を求めて取材しているように感じる。

・避難所では、取材用の車が多く止まっていた。被災者の迷惑になっていても、移動することがなく、横柄な一面を見た気がした。

《 ボランティアのこと… 》

・避難所ではボランティアがいてくれてとても助かった。

・水害のときは、「家の中の泥だし」という明確な作業があり、ボランティアもそのつもりで参加していたと思う。でも、震災は各家の片付けも家によって「やってほしいこと」が違うため、頼む方も頼まれる方も困ったようだ。とくにボランティアはあまりにもプライバシーが見えすぎて「どこまで手伝えばいいのか」悩んだと聞いた。

・友人の話だが、ボランティアに家の片付けをお願いしたところ、まず「私がしてもいいこと、どこまでお手伝いしたらよいかを教えてください」と聞かれたそうだ。そういう意味では、頼む側も計画性が必要ではないか。もちろん、ボランティアも心得は必要。

・確かに、今回は多くのボランティアが被災地に来てくれて、助かったのだろうが、中には常識のないボランティアがいたと聞いた。自前の食事を用意してくるのはいいが、明らかに「ピクニック気分」の人もいたようだ。避難所にいる被災者が菓子パンを食べているようなときに、豪華なお弁当に暖かい味噌汁を飲んでいたという。

《 阪神淡路大震災と… 》

・今回の震災は高齢者の被災が多い。都市と山間地など環境や状況もまったくちがう。阪神淡路大震災と比較してほしくない。

Q3) これからどうしたらいい?

《 危機管理 》

- ・ 水害を軽くみていた。危機意識は必要。
- ・ 避難所は市立小・中学校、保育園、コミュニティが指定されているが、必ず自分が住んでいる学区でなければ行けないという決まりはなく、被災した場所の近くの避難所に避難していいことになっている。日ごろから、家族で避難所を確認しておくとい。
- ・ 日中は若い人が仕事でいないので、老夫婦だけになってしまう。また介護が必要な人を避難させるのはとても大変だと思った。高齢者や災害弱者も避難する手段を日頃から考えていたほうがいい。
- ・ お風呂の水(トイレ用)、大きなろうそく、電池、そして2日間分の食料は用意したほうがいい。ただしカップ麺はお湯が沸かせないときもあるのでやめたほうがいいのかも…。

《 コミュニティ… 》

- ・ 被災地ではみんなが大変。被害の軽い地域の町内会長や民生委員などが一人暮らしの安否確認や情報提供に動くのはどうか。
- ・ 町内会では、班単位で各戸の状況を把握。弱者を助け、夜の見廻り…など自分たちでできることは自分たちで守った。そういう意識やまとまりを心がけたい。
- ・ ご近所の他に別の人とのつながりもあったほうがいい。サークルや団体に所属するなど。そうすれば一人暮らしでも誰かが安否を確認してくれるから。

《 次世代へ… 》

- ・ 「絶対、大丈夫ということはない。自分の身は自分で守ること」を子どもたちに伝えたい。

《 ボランティア 》

- ・ これからはボランティア教育する場が必要だと思う。ボランティアする人の意義や受ける人の心得など、双方の「ボランティア教育」がとても大切。子どもはもちろん、大人にも必要。

《 心の傷… 》

- ・ 目の前で食器が割れた音、地鳴り…音に対する恐怖感がまだ残っている。余震もすごく怖かった。その後、テレビを見てもっとひどい家もあり、「まだいいほうだ」と言い聞かせているが、未だに余震があるとあのときのことがトラウマになっているのか、気分が悪くなる。これから「こころのケアが必要」と言われているが、本当にそう思う。
- ・ 大切なものも泥水に流されて跡形もなくなった。お金では買えない大事なものを失くした悲しみをこれから乗り越えていかなければいけないと思っている。

《 行政への要望 》

- ・ 自助努力ではできないことはやはり行政の力で何とかしてほしい。市民の役割と行政しかできないことがある。
- ・ テレビで市の対策本部の会議のようすが毎日放送されていたのを見ていたが、女性が一人もいなかった。復興にあたっては、ぜひ、女性の声を反映するシステムを考えてほしい。
- ・ 今回の地震は高齢者の被災が多い。そういう人たちの復興も重点的に考えてほしい。

《 声を出そう… 》

- ・ 市民の側として、誰の手が必要なのか、何をしてほしいかなど自分で言えるようになることも必要。



参加者の声(アンケートから)

- ・ このフォーラムを知り、参加させていただき、色々な方の発言を聞くことができ、本当に良かったし、勉強になりました。
- ・ いろいろな話を聞かせていただきありがとうございました。
- ・ 個人の問題はみんなの問題。一人一人の生の声での話し合いは意義深かった。
- ・ ウィメンズスタディズ・ネットワーキングの「語り合おう、あの時のこと」に参加。語り合いは意義ありと思う。今後の市民としての覚悟等、問題点に時間をもっとほしかったと思った。
- ・ 水害と地震を体験しました。みなさんのお話を聞かせていただいて、自分の思いと一緒に思っておりました。こんな機会にあえて力をもらいました。ありがとうございました。
- ・ まさかと思うことがいつ起きるか知れないとあらためて考えさせられ、日頃の生活で、頭の隅にいざというときのこと、どうするかインプットするようにしたいと思っています。
- ・ いろいろの方のお話をお聞きし、地震のときにたまっていたストレスが少しは取り除けたかなと思います。これからまだまだ不安の気持ちでいっぱいですが、前向きに生きていかなければと思ひ勇気づけられました。ありがとうございました。
- ・ 地震、水害、つねに命にかかわる問題をテーマにさせていただき、ありがとうございました。
- ・ 障害者や高齢者に対する行政の援助を！！
- ・ 月並みですが、多くの方のお話を聞くことができ本当に良かった。(リアルだった…) 被害の大小にかかわらず、大変な思いをされていることもよくわかった。
- ・ 全員の方が心打ちくだかれたことで、改めて実感いたします。自己の心構えが第一、日頃のコミュニケーションが必要と思いました。元気を出して…
- ・ 参加した方それぞれの体験を聞くことができ、自分だけではなく、みんなが辛く、切ない思いをしたことがわかりました。

** イベントを終えて **

みなさんの話をお聞きして、あまりのひどさになんとお声がけしたらよいか絶句してしまう場面もありました。それくらい大変な状況乗り越えて前向きにがんばってらっしゃる女性たちにエールを送ることしかできませんでした。また、被害の大小に関わらず、一人ひとりが何かしら「心に傷を覆っている」と感じました。「話すことで癒される」というコメントもあり、そういう場のない人がまだまだ多いというのが現状のようです。今回の災害を「貴重な体験」ととらえ、一つでも、何かに気づき、得るものがあれば、それが“力”となって今後の生き方にプラスになるのではないのでしょうか…。

《がんばろう、中越》・・・どう頑張ったらいいの・・・!?

でも、《へこたれていられない・・・》

被災者

- ・視覚障害者のご夫妻が防災用の服装で避難してきた→常に危機管理意識が必要と思う。
- ・会社（自営）には中国からの研修生6人と実習生11人がいる。研修生は避難所へ、実習生は各自で生活しているが→外国での生活は文化も生活習慣も違うので、生活を支援する方もいろいろ気遣っているのだが→非常事態の時の支援体制が必要だと思う。
- ・（避難所においても）中国からの実習生等との間で生活習慣と言葉の違いによるちょっとした気持ちのずれがあった。
- ・家に居ると怖いからと言って、ライフラインが復旧しても避難所にいた。
- ・高齢の方が呼吸困難になり救急車を呼びました。
- ・27日は6回救急車の出動をお願いしました。他県からきた車は病院までの道が分からず戸惑っていたようです。
- ・普段一人暮らしの人は、大勢で食事をする事、話す相手がいることを喜んでいました。
- ・人付き合いの苦手な人はストレスを引き起こしています。
- ・自分は家に帰りたいが、隣のお年寄りを残して帰るわけにも行かない、という人もいます。
- ・ずっと車の中で泊まっていた障害のある子ども（23歳）さんは、家のガラスが壊れ神社の鳥居が倒れて様子に怯え、片時も母親から離れず、姿が見えないと「ママ、ママ」と叫んでいます。
- ・躁と鬱をくりかえす女性。来週予定日だという妊婦さん。さまざまな人がいます。

避難

- ・避難所では7.13水害の経験から避難者名簿を作成した。
- ・呼び出しはできないから掲示板を設けた。
- ・避難してきた人からは→情報がほしい。動物アレルギーの人がいるので犬を何とかしてほしい。赤ちゃんのミルク用のお湯がほしい。毛布が足りない。等・・・さまざまの声があり、中にはこんな時にわがままではと思われるものもあった。

- ・市内には120数ヶ所の避難所があり、そこでは医療支援が行われている。
- ・昼間の避難所は、若い人たちは仕事に行き、高齢者だけが残っている。
- ・地震から10日も経つと→家に帰り後片付けをしたり風呂に入ったりして、夜には避難所でみんなと一緒に寝るとかそれぞれの生活パターンを作っている。
- ・車中泊→大人3人が身動きできないまま一夜を明かす→翌日は腰痛がひどい→4日目には腰の痛みがまんできず断念して（危険な状態の）家に入る。
- ・車中泊する場所がなく、あちこちの空き地や知人の駐車場を転々とした人もいた。
- ・福祉センターの駐車場へ避難。
- ・町内の公民館に避難→避難所として行政に認めてもらい、救援物資の配布も受けられるようにする。
- ・小さい子どもは夜泣きや騒ぐので迷惑になるからと、避難所に来てもすぐに出て車で寝泊りしている。

ボクサーのボディブローのように、じわじわと後から効いてくるダメージ

家族

- ・老人がこうしたさまざまなアクシデントに耐えられたとはとても考えられない。
- ・夫は退職し家に居て地震の後片付けに余念がなかった。早く以前の生活に戻ろうと頑張り完璧にやろうとしたところに問題があった。→妻と母に身体的疲労が濃くなった→大晦日に妻の憤懣は大爆発→母は鬱の症状が見られるようになる（投薬により快方。地震後3ヶ月後のことだった）
- ・被害の少ない地域へ避難した家族と町内会長として被害地域にとどまった夫。
- ・足の悪い姑を子どもと二人で抱きかかえて庭に出た。姑は地べたにへたり込み動けなくなった。（行っちゃだめだよ！という息子の叫びをふり切り、家の中へ）おばあちゃんの靴と車椅子を取りに入った。
- ・町内の防災委員の方に姑を負ってもらい小学校に避難した。
- ・一人では自宅に入らず、余震が来ると心臓がドキドキするという症状と不眠が続いた（急性ストレス障害）→症状を緩和する方法として、避難所を離れ知人の家や旅館などで数日を過ごす。
- ・急性ストレス障害で不安と緊張で混乱している心が（友人に）電話で話を聞いてもらう度に楽になり、あたたかい心遣いによってダメージが癒され、自分らしさを取り戻すことで乗り切ることができた。

- ・飼犬の目は点。放心状態の姿だった。
- ・余震の時、犬がしっかりとしがみついて離れなかった。
- ・一人で暮らす実家の母→近所の人が気遣ってくれている。
- ・おばあさんが居るので、夜だけ（避難所である）学校に泊まり、昼は店に出る生活。
- ・（高齢者はトイレに近いのを心配するので）ガレージのコンクリートの床に布団を敷いて寝てもらった。
- ・（余震が来たら奥に寝かせた親を自分の体力では連れ出せないから）玄関の上がり口に寝てもらった。
- ・在宅介護では（ライフラインがストップしたせいで）家で世話したいと思ってもできず、縁故を頼って遠く離れた施設に入ってもらわなければならなかった。→受け入れの施設や病院でも廊下に寝せるしかない所もあり、いたるところで支障をきたしていた。
- ・日常のこまごまとした小さなことでも相談しやすい人や相談できる場が必要。これが地域の役目・隣近所のコミュニケーションだと思う。
- ・カウンセリングや特別の場でなく、誰かと話すことで恐怖や心配ごとを共有してあげられるのではないのでしょうか。話すことで癒されることありますよね。

子どもたち

- ・子どもたちも連絡網が回り「しばらく休校」となった。
- ・児童館（学童保育）も休館
学校の連絡網で、連絡が取れない家庭。母子家庭で祖母が子どもという家庭。父・母が交代で仕事を休んで子どもと家にいる家庭。子どもが一人で留守番をしている家庭・・・などさまざまであった。
- ・休校になった孫たちが（祖母の）家に来ている。父親は被害の大きかった親戚へ手伝いに、母親は勤めの学校へ。
- ・泣き止まずに困った。夜になると泣き出す。地震の時にいた部屋には決して入らなくなった。親から離れなくなった。

仕事

- ・24日、朝一番から夫は会社に行った。私の職場からは「連絡があるまで自宅待機」→いつもと変わらず仕事に行っていた夫と、残された私たち。非常時のこの構図は日常生活の縮図ではないか。
- ・職場（ハンバーガー店）に、子ども一人で留守番させておけずに、店に連れて働きに出ているお母さん。
- ・長岡市の地域防災計画によれば、震度5強以上の地震が発

生すると、原則的には全職員が勤務地あるいは近くの避難所に向かうことになっている。

生活

- ・生活が一変し、朝から顔を洗う気にならない日が続いた。
- ・七輪で火をおこし、山から引いた水を利用。庭でバーベキュー。
- ・熟睡できない日が続いた→酒の量が増えた。
- ・これからは、余計な物を持たないシンプルな暮らしを心がけたい。
- ・部屋の電気は一晩中つけたまま、玄関に近い部屋で服を着たまますんだ。
- ・1ヶ月間は家族（夫婦・子ども・義母）で川の字になり服を着たまます眠る生活。
- ・今までは畑の野菜を利用して食事を作っていたが、これからはスーパーなどへ買出しに行かなければならない。これまで通院していた病院もどうなるのか？高齢者家庭には不安が多く不便になった。
- ・世帯主として家族を守ってきた男性→同居の娘婿が新しい家を造ることになり男性は自分の居場所がなくなるのではないかと「寂しい思い」をしている。
- ・家を建て直す財力はないが、今まで住んだ家から他へは移りたくないという高齢者が多くいる。

情報リテラシーの大切さ！

支援

- ・商品を販売している企業の「お客様相談室」宛にメールを送ったり、電話をかけたりに「被災者が求めているモノ情報」を伝えてください。ただ伝えるだけでかまいません。皆さんの声が企業・行政を動かします。
- ・大量の物資を焼却するのに多額の費用がかかっています。あなたの送った物資は外に山積みで配布されていません。役所や行政やボランティアが悪いわけではありません。その余裕が無いのです。
- ・現地では今、「大人用の紙おむつ」が不足しています。（トイレが使えなかったり、下着を替えられなかったりするので）「パンティライナー」があると重宝します。（高齢者は使い捨てカイロをむむことすらできないので）「貼るカイロ」が必要です。
- ・（続々と届く救援物資を種類別に分けて配布する人手がありませんので）段ボールには外側に「毛布」「洋服」「下着」など、中身を大きく書いて・・・できれば、声がけしあって、ある程度まとまった数を・・・

- ・支援活動も時間が経つと変わってくる。当初は、食べる・寝るが緊急だったが、今は、心のケア・健康管理が大切。
- ・マスコミへは、支援活動の妨げとなり被災者の心労を増加させる今の取材のやり方についての抗議の声を上げて下さい。あまりにひどい状況です。
- ・一人暮らしの母→時には「助けて」と声を出し、人に甘えることも必要。
- ・（一人で留守番する子どもを）こんな時こそ、同じ町内・同じ学校の者として、みんなで連携できたら良いと思った。
- ・支援の対象は「くくり」の中で行われた。「くくり」に入っていない人は自ら足を運ばなければ支援の対象にならない。少数派のことも尊重して支援の対象からこぼれないようにしてほしい。
- ・公的な支援金や補助金には上限や用途範囲に枠がはめられていたりするから、領収書の提出や報告義務のないお金は、本当にありがたい。

ボランティア

- ・（自主避難の）公民館で、自分の家の片づけをしながら大勢の町内の人たちの食事の世話や公民館の管理を自主的に行う。
- ・他県・他市から応援に来てくれた職員の皆さん。～ボランティアの皆さん。～医師や看護師さんたち医療救助員。～民生委員。～町内の防災委員。～町内会長。
- ・学校施設のあらゆる機能を開放して協力、足りない物品を自宅から運んで提供してくれた先生方。
- ・自らも被災者でありながら、避難所を利用させてもらったからと、差し入れや清掃やその他ボランティアをして下さった人たち。
- ・自らも被災者だったが、被災10日後から自分の仕事を通してメンタルケアと就労のためのボランティア活動を開始。
- ・ボランティアの援助の呼びかけのチラシが各戸や避難所に配られたが、活用する手段の相談も誰かがしてやらなければ利用者がいない、という状態だった。

報道

- ・マスコミの取材陣50人くらいが現場付近に陣取っているため救援物資を運ぶトラックは遠くに止めることしかできず、ボランティアの人たちがせっせと現場に物資を運んでいる。報道陣はそれを手伝う気配すらない。
- ・心労と肉体的疲労が積もっている被災者に、当然のようにマイクを向け24時間カメラをまわしっぱなしにしている神経が理解できない。被災者の身になって報道してほしい。
- ・一部の地域の報道に終わらず、いろんな場면을報道するこ

とも必要。

- ・（シリーズで現地を追う報道も大切だが）報道されない地域と支援に格差が起こりうる。そういうことも考えて同じ被災者への心配りも必要。
- ・遠慮のないテレビカメラが追いかける。マスコミの傍若無人な振る舞い。
- ・各地の被害状況を伝えることや被災者の窮状を訴えることは、新聞の大切な使命である。
- ・生活者の立場で、分かりやすく内容を伝えてほしい。
- ・新聞の利点を活用して、何回でも繰り返し丁寧に、記事にしてほしい。
- ・小千谷小学校に小泉首相が来るということで、マスコミ報道人の数はさらにふくれあがり、「毛布の配給ができないので、小泉さんが帰るまで待つように」という連絡が入りました。何のための視察なのでしょう？
- ・午前中にも、数名の政治家さんが小学校に来ましたが、トイレはどこかとたずねられ、仮設トイレを案内したところ、「わたしに仮設トイレを案内するつもりかね？」と、言われたそうです。いったいこの国は、どうなっているんでしょう…。

復興・復旧

- ・町のあちらこちらで建物の取り壊しが始まり、櫛の歯が欠けたように空き地が目につく。復旧はまだまだ。これから先は長い。
- ・道もいたるところで下水管などが抜け上がり、修理をしても、また凹みが進んでいる。
- ・通勤の大動脈であるJR信越線の高架線や国道404は、いつ復興するのか。一方通行の不便さが解消されない。

我が家

- ・二階の部屋の大修理を自力で始めた。土壁を落とし、運び、ベニヤ板の打ち付け、ペンキ塗り・・・連日夜半まで続いた仕事。疲れて帰ってきても休むことなく作業が待っていた。辛かった。この時ほど地震を恨んだことはない。
- ・大工さんが手を尽くしてくれた応急修理の済んだ家～当初は異常に感じた柱の傾きや床の歪みなども「慣れる」とあまり苦にならなくなった～期待通りの安全と安心は得られないだろう。それでも、適当な所で折り合いをつけてこの家で暮らしていくつもりだ。

これからの自治体の動きを私たちは市民として注意深く見守る義務と役割がある。そしてこの経験の中から地域の課題を提言できる市民としての力をつける。

プライバシー

- ・女性たちの着替えや授乳施設もない状況に声もなかった。
- ・たとえ相手のことを思えばこそであっても立ち入れない領域がある。
- ・相手がこちらの差し出す「手」を求めていないのなら構わないのだが、遠慮していたり知らないからだとしたら、もう一歩へ踏み込んだ方がいいのだろうか。
- ・「人目を気にせず着替えや授乳をしたい」「寝顔を人に見られたくない」→段ボール製の間仕切りを加茂市のメーカーが開発→災害時の備蓄物資の中に必需品として位置づけたらどうか。
- ・災害時要援護者名簿の共有→プライバシーの観点から充分そのことが機能するか不安がある。

防災

- ・長岡市は自主防災比率が低いとされるが、私が住む町内では自主防災組織の活動が活発で、震災の一週間程前に震災避難ビデオの回覧が行われた。
- ・サイレンの音があちこちで響きわたり、パトカーが注意を呼びかけて回っていた。
- ・阪神淡路大震災の生活情報はとても役に立った。
- ・市役所関係の建物は安全を考えて全て閉鎖した。したがって予定の行事は全てキャンセル。
- ・7. 13 水害後の対策→三条市の6項目にわたる取り組み→細部にわたってきちんとした検証が必要と思う。
- ・他人事がわが身となった。忘れた頃にやってきた。→防災準備の重要性。
- ・自治体の防災計画や避難対策は今回の大地震を機に見直しがされるべき。移動困難な高齢者や障害者の避難先、避難方法、避難体制、その支援体制はどうなっているのか。高齢者、障害者、女性の視点で見直しがされるか、そこから発信される要望や提言がどのようにとりいれられるかを見極めなければならない。
- ・家族は常に一緒にいるとは限らない→いろいろなシチュエーションを考え、避難先までいかにして移動するか、方法や手段を家族全員で共通の認識を持つことは絶対必要。
- ・原発のある町・柏崎→防災無線が全世帯に備え付け→町の地震情報・ライフラインの回復状況・避難連絡等絶えず伝達→防災無線のありがたさと同時に「原発のある町」を再認識。

大事な人に無事を伝えたい！ その時どうする？

連絡方法

- ・自分の家の電話は通じたが、他の家の電話が駄目で通じる所はすくなくかった。
- ・携帯は通じず、メールは夜半になって通じた。
- ・電話・携帯・パソコン全てが使用不能になった。運良く携帯メールだけ使えた。

アクシデント

- ・（地震当日）あわてたあまり物につまづき脛を打ってすりむいた。
- ・（2月28日）地震で窪んだ所に氷が張っていて、転んで左手首を骨折、全治6週間。
- ・携帯電話を充電する機器が備えられ、多くの人が利用したが、充電している間にいくつも携帯が盗まれた。
- ・救援物資で弁当の差し入れをするという電話があったが、結果的にそれはいたずら電話であった。善意への感謝に「用心」という二文字も必要。

